岡山孤児院の茶臼原農場学校での 5年目の教育実践の成果（1） ― ある農場学校生の1月から3月の日誌分析を通して ―

Results of five-year education practice in Chausubaru Farm School of Okayama Orphanage (1)： Analysis of a farm school student's diary from January to March

菊　池　義　昭

【要　旨】

本稿は、岡山孤児院の茶臼原農場学校での5年目の教育実践の成果を、ある農場学校生の書いた日誌の分析を通して明らかにした。その結果、①農場学校での教育と宿舎等での生活の内容が把握できた。②農場学校の教育内容では、教科名と時間数が判明し、農閑期の3学期は学科教育が充実し、かつ本生徒も期末試験に積極的に取り組み、農業等の基礎知識を学ぶことに役立った。また、③宿舎等での生活内容は、農業見習先への訪問や近隣町村への買い物、日曜学校の準備や青年会などの運営に参加し、彼に大きな影響を与えた。④農場学校生の家庭舎への農業支援は、3月に実施され、各種の農作業を経験していたことが分かった。⑤茶臼原孤児院の行事等への関わりでは、第5回石井院長紀念会などへの参加、特に、炭谷小梅の連続講話を聴くなどし、石井院長のキリスト教の深い信仰を理解し、その遺志の継承を再認識するなどの影響を受けた。⑥出身者や同校卒業生の殖民との協力関係では、卒業生の殖民宅の家づくりを実施するなどし、自分の近い将来をイメージできたとみる。

そして、⑦本人の内面的成長は、農場学校での①から⑥までの日常的影響を前提に、質素で堅実な生活を実行し、善人として努力して生きていくことで必ず実りある人生が訪れるという考え方を持つまでに成長していた。また、このような内面的成長の背景には、開校後5年目を迎えた農場学校が培ってきた歴史と、その中で育まれた同校独自の文化が存在していたことが仮定できた。

【キーワード】

岡山孤児院、茶臼原農場学校、石井十次、大原孫三郎、炭谷小梅

【Abstract】

This paper reveals results of five-year education practice in Chausubaru Farm School of Okayama Orphanage by analysis of a farm school student's diary. The results are as

follows:

－First, the education and living conditions in the farm school is grasped.

－Second, in the education, there were subject names and class hours and agricultural off-season, curriculums were enhanced in the third semesters. The student worked hard to the final exam study and learned the basic knowledge of agriculture, etc.

－Third, in his living conditions, he visited his agricultural apprentice destination, going shopping nearby towns and villages, and participated in the preparation for Sunday school or the management of the Youth Association. These experiences had a great influence on him.

－Fourth, the agricultural support to his home building was carried out in March and he experienced a variety of farming.

－Fifth, about the events of Chausubaru Orphanage, he participated in the fifth Juji Ishii director memorial celebration, listening to Sumiya Koume's continuous lectures, understanding Ishii director's deep faith in Christianity, and re-recognized that he followed in Ishii's footsteps.

－Sixth, as to Okayama Orphanage's graduates' cooperation relationship with Chausubaru Farm School's ones, he built the houses of graduates who became self-supporting peasants and he could image his future.

－Seventh, in his inner growth, he began to think he had to strive to live austerely as a good man and that he could get a rewarding if so. It is assumed that the background of the inner growth was the influence on his daily life of the school shown in the above six of contents 6 items.

In other words, there were the history of the school celebrated its opened five 5 years and the unique culture that the school had cultivated.

【Keywords】

Okayama Orphanage, Chausubaru Farm School, Jyuji Ishii,
Magosaburo Ohara, Sumiya Koume

はじめに

筆者は、これまで一連の岡山孤児院史研究を実施してきたが[1)]、その最終目標は同院での生活や教育という養護実践を通して、その当事者である院児（貧孤児）たちが、どのように成長し、どんな人生を歩んだかを解明することであると認識してきた。なぜならば、石井十次院長を含む全ての職員や関係者は、院児たちが成長し、１人の社会人として人生を歩むことを願って、多様な実践を試みてきたと判断するからである。

そのため、岡山孤児院史研究の最終目標は、同院の養護実践等が、当事者である院児たちの成長と彼らの人生にどのような影響を与えたかという成果（結果）まで立証しないと、石井院長を含めた職員や関係者の意志（本意）に応えていない研究レベルになってしまうとも判断するからである。

また、歴史研究は、過去という時間と空間によって固定された事実（事象）を分析対象とするため、すでにその中に結果としての成果が反映され、それ故、その結果（成果）まで追求する研究に到達しないと、研究としての存在意義が半減するとも理解するからである。

ただし、当事者の院児たちの成長に直接影響を与えた事実を裏付ける資料は少ない。それを裏付ける資料として最も有力なものは、教師や主婦等が書き残した個々の院児に関するケース記録か、当事者である院児自身が当時の自らの生活や教育などを書き残した日誌などが、これに該当するが、そのような資料はほとんど残っていないことが多いからである。幸いにも、後者の日誌が1年分だけ残っていたので、その日誌を使って、院児たちの成長に影響を与えた内容の解明を試みてみることにする。

つまり、本稿では、当事者である院児たちの成長を、ある在院児が書き残した日誌を用いて、岡山孤児院の養護実践、とりわけ茶臼原農場学校（以下農場学校）での教育実践等が、その農場学校生の成長にどう影響を与えたかという成果（結果）に迫っていくことにする。「ある在院児が書き残した日誌」とは、『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』で、この日誌は農場学校生の岡－竹（氏名の略称）が1919（大正８）年の１月１日から12月31日までの同学校での教育と宿舎での生活などでの体験を毎日克明に記した行動記録であった。

特に、記載形式は、起床から始まり、午前中の学科教育、午後の実習教育、夜の生活内容という順序で書かれていた。このため、1919年の岡－竹本人の毎日の行動（生活）内容と、それに関係する農場学校での教育実践等の実態が判明する。ただ、行動記録が中心であるため、本人の考え方や感想などはあまり書かれていないが、これらのことを前提に、岡－竹の成長に、農場学校の教育実践等がどう影響したかに迫っていくことにする。つまり、日誌という資料は、当事者自身が毎日の生活の中で印象に残った出来事を中心に記録するという特徴があり、これを言い替えると、当事者自身の毎日の生活の中で、彼自身に影響を与えた印象を書き残した記録ということができる。この

ため、岡－竹の日誌には、毎日の農場学校での教育や宿舎での生活を通して、岡－竹自身が日常的に影響を受けた内容（日常的影響）に関する事実としての印象が書かれていると理解できる。そのような意味で、岡－竹日誌に書かれている内容は、毎日の日常生活の行動記録が中心であったとしても当時の彼の日々の成長に日常的に影響を与えた事実を自らの手で記した資料であると言える。さらに、「毎日の日常生活の行動記録」であるため、当時の農場学校生が同学校において、どのような教育を受け、どのように生活し、どのような考え方を持つように成長したかという、1919年当時の同校での具体的な教育内容や宿舎での生活内容などの事実も確認できる資料にもなっている。このため、岡－竹日誌の内容を分析すれば、同校での教育実践などの内容が、即（イコール）彼の成長に日常的に影響を与えた内容として理解できると判断する。

さらに、岡－竹日誌には、少数かつ断片的ではあるが、彼の内面的な成長を知る、彼自身の感想、意見、主張などの考え方が記載されているため、彼の「内面的成長」も理解できる。その意味で本日誌の内容は、岡－竹に与えた「日常的影響」を基本に、彼の「内面的成長」も分析でき、両者を組み合せれば、農場学校での教育実践等が彼の成長にどう反映していたかにも迫っていくことができると理解する。

そして、このことを前提に、岡－竹日誌の内容を解明する分析課題を示すと次のようになる。岡－竹日誌から①農場学校での毎日の教育と宿舎等での生活の全体像を把握し、次に②農場学校での具体的な教育内容を明らかにし、その影響を検討する。③宿舎での実際の生活内容を明らかにし、その影響も検討する。④農場学校生の家庭舎への農業支援などの内容を明らかにし、その影響を検討する。⑤茶臼原孤児院の行事等への関わりの具体的内容を明らかにし、その影響を検討する。⑥出身者や同校卒業生の殖民との協力関係を明らかにし、その影響を検討する。そして、①から⑥で明らかにした内容からみえてきた⑦本人の内面的成長に迫っていくことにする。

ただし、紙面の関係から本稿では、1919年１月から３月までの日誌の内容を分析していくことにする。３月までとしたのは、この期間が農場学校の３学期に該当し、１つの区切になるからである。

また、岡－竹日誌を分析する手順は、とりあえず１月から12月までの日誌を１ヶ月ごとに分け、１ヶ月ごとに①から⑥までの事実を抽出して分析し、⑦の内容に迫っていくことにする。さらに、岡－竹日誌の内容を読むと、漢字等に誤記があり、かつ文章そのものも十分に理解できない部分が含まれていたが、それらについては筆者の判断をまじえて解釈しながら行間を読みつつ、①から⑥の事実をまとめることにする。また、誤記等の存在を知ったのは、筆者が一度岡－竹日誌を翻刻した経験があり[2)]、その翻刻資料を再点検しながら①から⑥までの事実と彼への影響をまとめていくことにする。なお、日誌の文章や漢字の誤記などの記載内容そのものも、岡山孤児院での教育等から、岡－竹自身が直接的に影響を受けた事実の１つであることを記しておき、紙面の関係から個々の文章等の修正には言及しないことにする。

そして、岡－竹日誌に出てくる事実だけでは、その事実が日誌に記載された背景や前提条件を十

分に理解できない側面があるため、1919年当時の農場学校の概要を含めた茶臼原孤児院の状況や、岡山孤児院の全体的動向などを最初に紹介する。その順序は、まず、1919年までの岡山孤児院や茶臼原孤児院の状況（動向）を述べ、次に同年の農場学校での教育等の概要と岡－竹の入院後の経歴となる。

１．1919年の岡山孤児院と茶臼原孤児院等の動向

１）1919年までの岡山孤児院の動向

1914（大正３）年１月30日に石井十次院長が永眠し、その遺志を受け継いで、後継者として倉敷紡績株式会社社長で、岡山孤児院の評議員であった大原孫三郎が最高責任者の理事に就任した[3)]。大原理事は、その後大改革を実施し、岡山孤児院は、岡山本部、茶臼原孤児院、大阪分院の三部制から、1918（同７）年１月30日に大阪分院を財団法人石井記念愛染園に発展的に独立させ、二部制に縮小した[4)]。また、1915（同４）年４月には、茶臼原孤児院内に農場学校を開校し、従来までの小学校卒業→農業見習生→殖民として独立という院児の養護実践システムを、小学校卒業→農業見習生→農場学校→殖民として独立というシステムに変更した[5)]。さらに、２つの練習農場の設置など養護実践システムの体系化が最終段階を迎え、これに連動する茶臼原農村づくりも日向地方への「割込移住」と殖民の自作農への独立の方針が示され、岡山孤児院の養護実践は、茶臼原孤児院に集約されていくことになった[6)]。

しかし、1919（同８）年１月23日の第17回評議員会後の臨時評議員会で大原理事の辞任と後任の理事として大庭猛評議員が選任され、大原理事は評議員として残ったが、この1919年は岡山孤児院、とりわけ、茶臼原孤児院の組織に大きな変化をもたらすことになるのであった。

新理事となった大庭猛は、父が西南戦争で負傷し、それが元で1884（明治17）年に死去し、母も相前後して失い、1890（同23）年創立３年後の岡山孤児院に入り、石井院長の薫陶を受けた人である。その後1892（同25）年には同志社普通部に入学し、1896（同29）年サンフランシスコに渡米して大和商会を創立し、1902（同35）年には帰国し横浜市に同商会を設立し、大原理事の資金援助を受けながら貿易商として手広く活躍していた。このため大原理事の後任として大庭新理事に白羽の矢が立ったとみる。さらに、先の臨時評議員会では、茶臼原孤児院分院長の石井タツを岡山本部主事に、松本圭一農場学校長を茶臼原孤児院分院主事に異動することも定められ、石井院母と松本校長の２人が大庭新理事を補佐する体制を取ることになった。

そして、当時の岡山孤児院の財政について確認しておくと、すでに1918年時点で、大原家よりの124,760円４銭５厘を含む合計167,738円43銭もの借入金を抱えていたが、1919年同家より103,846円余の寄付と岡山本部の残りの土地を同家に売却することで負債は全て償却し、大原理事は自分の時

代に作った借入金は自らの責任で解消して、大庭新理事に引き継いでいた。また、残った資金で済美財団をつくり、茶臼原などに土地を購入して、その小作料を茶臼原孤児院の運営費用とし、さらに農場学校から練習農場を経て殖民として独立する青年院児の移住地を確保しようとしていた。

このように、大原理事退任の1919年の岡山孤児院の運営は、大庭新理事、石井院母、松本校長の３人による役割分担別の集団指導体制を目指し、大原前理事も評議員としてその体制を後見するという状態で出発したと理解できた。

２）1919年の茶臼原孤児院の動向

1919年の茶臼原孤児院は、１月23日の臨時評議員会での大原理事から大庭新理事への移行決定にともない、同院の運営組織も改編され、松本分園主事を中心とする職員体制の整備に着手することになる[7]。つまり、大庭新理事が２月16日に来岡し、20日茶臼原孤児院に来院することになるが、２月16日の大庭新理事の来岡時に大原前理事との会談で、今後は「院内ノ組織ヲ総務部、養育部、教育部」の３部門に編成することにした。その後、総務部、養育部、教育部の３部門を基本とする職員体制の再編成が１年間かけて実施され、その再編前後の職員体制と役割分担の推移をまとめると表１のようになった。

そして、３月21日大原前理事は、岡山本部主事となった石井院母と茶臼原孤児院分院主事となった松本圭一を、倉敷紡績株式会社事務所社長室に呼び、柿原政一郎主任の立合で今後の具体的な方針を言い渡したのであった。その方針の１つは、３月１日の済美財団の申請で、この申請により同院の財政運営と青年院児の農場学校から殖民へ独立する養護実践システムの支援強化が担保され、さらに４月30日に小学校の補習科を農場学校の普通学部へと再編し、農場学校は農学部となる２部制に変更されることになるのである。そして、５月１日より新体制で運営されることになり、この「新体制」での運営の中心は、松本分園主事と主任者会であった。また、７月４日の主任者会では、男子の退院時期が、病弱者や障害者を除いて、農場学校卒業と徴兵検査終了後とし、女子は結婚を以って退院とする等を決議し、大庭理事の承認を求めることになった。

これによって、院児の退院の時期と根拠が定められることになり、同院の養護実践システムの最終地点が明確化した。このため、表２のように1919年は、１年間で109人減少し、家庭舎の在院児、農業見習生、農学部生の人数も変化した。特に、７月に68人も退院したが、その大半が農業見習生と農学部生であり、その後も後者は減少傾向にあった。また、12月末には、茶臼原孤児院全体で、家庭舎に100人の院児が生活し、小学校と農場学校普通学部に通学し、農場学校農学部が38人、農業見習生が78人、里預児４人、自宅救助児２人の計222人になった。さらに、殖民は、茶臼原殖民地に15戸、樫野第一練習農場に６戸、柳井迫第二練習農場に２戸、その他近隣地域に11戸の計34戸となり、宮崎県下で結婚した者も23人になっていた。

このように、1919年の茶臼原孤児院は、大きな組織改編が実施され、農場学校も同校普通学部と

表１　茶臼原孤児院の新旧職員体制他の推移

旧職員体制他			新職員体制他		
	役割分担他	職員氏名		役割分担他	職員氏名
庶務（事務所）	茶臼原分院長	石井　タツ	庶務（事務所）	茶臼原分院主事	松本　圭一
	庶務	鷹津　繁義		庶務会計	長野　米吉
	庶務、土地係	山本哲二郎		庶務、土地課	山本哲二郎
	土地係嘱托	田中　正善		土地課山林係	末藤　新市
	聖務	小野田鉄彌		聖務	小野田鉄彌
	会計	長野　米吉		財産管理建物	長野　米吉
				財産管理土地	舘野　知春
養育部	主婦	下村　久子	養育部	養育部々長	石井　タツ
	主婦	松尾　やす		普通養育主婦	下村　久子
	主婦	小野　ソト		主婦	松尾　やす
	主婦	佐藤　カメ		主婦	小野　ソト
	3月13日退職　主婦	浅田イワヲ		主婦	佐藤　カメ
	主婦	朝山　モク		主婦	高橋　テイ
	主婦	柳沢　モト		主婦	朝山　モク
	主婦	石田　ベン		12月8日退職　主婦	柳沢　モト
	主婦	綾部　順		主婦	石田　ベン
				主婦	綾部　順
				特別養育（院内特	別依托）
				托児幼稚園	上田八重子
養育部（小学校）	4月3日退職　校長	道満　筆美	教育部	教育部々長	松本圭一
	教師	永田　溥之		4月29日就職小学校教師	則松松太郎
	教師	福島　虎竹		小学校教師	福島　虎竹
	3月13日退職　教師	恒吉　静江		3月23日就職*小学校教師	安藤　兼慶
	教師	福島　夫人		8月31日就職*裁縫教師	下川せい子
	見習生係	信永源次郎		12月8日就職*裁縫嘱托	安藤チヤ子
	見習生係	舘野　知春		見習教育係	信永源次郎
	女子見習生	道満　夫人		農場学校校長	松本　圭一
農場学校	校長	松本　圭一		同教務主任	上田　宗一
	教師	上田　宗一		同教師	高橋　善導
	教師	高橋　善導		*同嘱托	直井　武夫
	嘱托	江川　栄		同普通科主任	永田　溥之
	嘱托講師	小野田鉄彌		同嘱托	大山　熊太
	実習教師	津江　市作		同嘱托	小野田鉄彌
	実習教師	永友今朝次		同実習教師	津江　市作
	家畜係	斉藤　新蔵		同実習教師	永友今朝次
	会計	小野田　鎮		同家畜係	斉藤　新蔵
	練習農場駐在	末藤　新市		同会計	小野田　鎮
				独立助成課	松本　圭一
	農場管理事務、塾舎農事指導			兼任	津江　市作
	卒業生出身者独立助成指導			兼任	小野田　鎮
	松本圭一	高橋善導		物品取次販売部事務員	大島　三郎
	上田宗一	津江市作		畜産及び農場経営部助手	楠戸 赳
	永友今朝次	斉藤新蔵		（財団法人岡山孤児院『大正八年度年報』他より作成）	
		小野田鎮			

＜注＞*と役割分担他の内容は筆者の加筆あり。

表２　各所属別院児数

	家庭	見習	農場	里預	合計
1月	120人	143人	56人	−人	319人
2月					
3月	119	110	80	−	309
4月	102	120	80	−	302
5月	103	121	79	−	303
6月	102	121	79	−	302
7月	100	77	55	2	234
8月	100	83	49	2	234
9月	101	81	38	3	223
10月	102	81	38	4	225
11月	103	79	38	4	224
12月	100	78	38	4	220

＜注＞家庭は家庭舎在住、見習は農業見習生、農場は農学部在籍生、里預は里預児の略。(『大正八年度茶臼原週報』より作成)

農学部に改編されたこと等が確認できた。そこで次に岡－竹が在学していた1919年の農場学校の概要をみていくことにする。

３）1919年の農場学校の改編とその概要

1919年の農場学校は、前述したように、大原理事から大庭新理事への交代にともなう茶臼原孤児院の組織の大改編に連動し、同校普通学と農学部に移行した[8)]。つまり、同院の「大改編」の中心は、これまで茶臼原尋常小学校と農場学校が実施していた教育を一体化し、これに農業見習を組み入れ、新たに独立助成課を設置し、それらをまとめ教育部に改編したことであった。さらに、これは同小学校卒業→農業見習→農場学校→練習農場→殖民として独立自活するという養護実践システムを教育部が一貫して実施するという組織体制に改編し、その責任者を松本分園主事に決定したものであった。この教育部の組織図（案）を示すと図１のようになる。ここでは、同小学校と農業見習（見習教育課）の改編の内容は省略し、農場学校の改編の経過と内容を次に紹介してみる。つまり、農場学校は、５月１日から茶臼原尋常小学校の補習科を編入して普通学部とし、さらに教育年限を２学年制から３学年制に拡充することにした。ただし、女子は２学年制とすることにした。また、従来の農場学校は農学部に改称し、全体的に同校の役割と位置付がさらに重要視されることになった。このため教職員体制も大きく変化することになる。そこで、普通学部と農学部の生徒の全体的動向を確認し、次に同校の教職員体制などの内容をみていくことにする。

まず、普通学部は、５月１日に茶臼原尋常小学校尋常科６年生17人が普通学部１年生として入学し、同補習科１年生８人が普通学部２年生に移行した。また、同補習科２年生12人は、卒業後の４月２日と５日に新農業見習生として付近の農家に奉公に出て行った。このため同部は２学年編成で

図１　教養部の組織図（案）

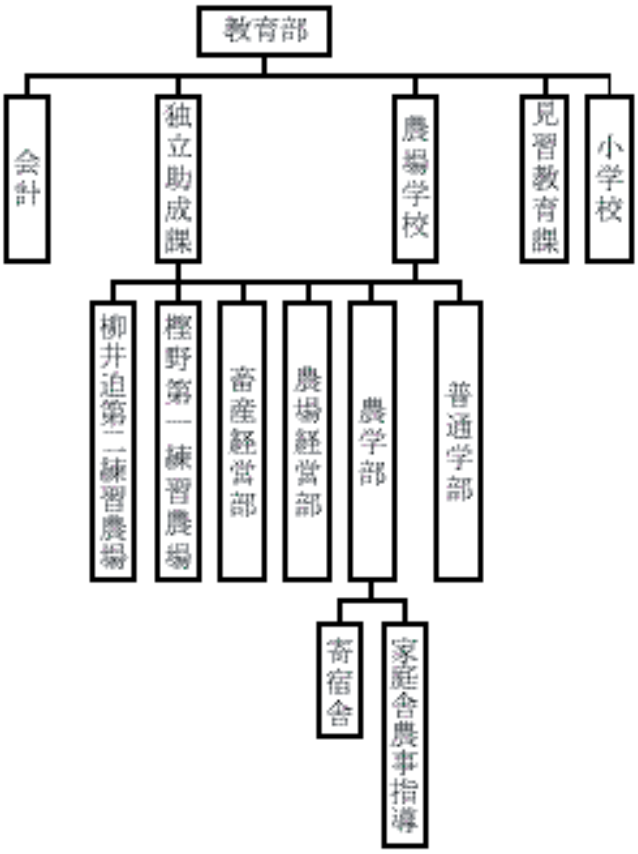

表３　農場学校の各学年別生徒数の動向

		5月1日現在			12月末現在		
		男子	女子	計	男子	女子	計
普通学部	1学年	10人	7人	17人	8人	6人	14人
	2学年	7	1	8	5	1	6
		2月5日現在			12月末現在		
農場学校	予科本科	17人	−人	17人	農学部1学年		
	予科別科	12	−	12	21人	−人	21人
	本科1年	17	−	17	農学部2学年		
	本科2年	13	−	13	17人	−人	17人

（表1と同様）

出発し、12月末現在は表３右上のように同１年生14人、同２年生６人に減少したが、次年度から３学年制を取ることになった。

農学部の方は、表３左下のように改編以前の２月５日例年通り農業見習生の中から予科生を選び、本年は予科本科生17人と予科別科生12人の計29人が入学することになり、彼らは農業見習期間２ヶ年から10ヶ年を経た者であった。また、５月１日から農学部に改称され、予科生は農学部１年生に、農場学校１年生は同部２年生に進級し、さらに農場学校２年生13人のうち11人は実習期生となり10月１日に卒業した。このため、農場学校（農学部）は２月から４月までは事実上３学年編制、５月から９月までは３学年編成に、10月から12月までが２学年編成になった。そして、12月末現在では普通学部20人（男子13人、女子７人）、農学部38（男子）人の合計58人となった。

この84人から58人の生徒を教育するための農場学校の教職員体制をみると、まず５月１日に永田溥之小学校教師が農場学校普通学部教師として移動し、兼任を含め10人体制となり、１学期末の学部別、教科別等の役割分担は表4のようになった。つまり、松本圭一分園主事が校長であることに変りはなかったが、授業は担当せず、茶臼原孤児院の全体的管理（事務）と新設された済美財団の仕事を兼務していた。上田宗一、高橋善導は普通学部と農学部の両方の教科を担当し、さらに江川栄、大山熊太、小野田鉄彌は嘱託で両部の教科を担当し、永田のみが普通学部の教科担当であった。また、津江市作と永友今朝次は農業実習の担当で、津江は農場及び独立助成課の事務を兼務し、永友は体操も担当していた。そして、小野田鎮が農場学校全体の会計と事務を務め、取次部も兼務していた。また、５月１日からは、大島三郎が物品取次販売部事務員として、楠戸赳が畜産及び農場経営部助手、宿舎世話係助手として就職し、同校の物品取次販売部、畜産経営部、農場経営部などの充実も図られた。

10月に入ると、10日に江川が退職し、群馬県渋川町に移ったため、５月に小学校の嘱託となった直井武夫が農場学校に異動し、さらに10月17日来院した中村光霽が、29日より臨時嘱託で英語と歴史を担当することになった。ただし、中村は12月27日退職し東京に出発し、取次販売部担当の楠戸赳と家畜係の斉藤新蔵もすでに退職していたようで、12月末の教職員体制は兼任を含め10人体制で、1920年に引き継がれた。

また、新設された独立助成課は、茶臼原孤児院の運営組織としては新しい部門の登場となる。その前身は、農場学校卒業生のために開設された2つの練習農場で、同農場の卒業生が毎年増加して来るため、1919年５月１日から独立助成課として農場学校より分離したとみる。このため、同助成課の登場は、同時に岡山孤児院の養護実践システムの最終段階の新たな整備を意味し、この時期から重要な仕事になると理解できる。

表１を見ると独立助成から独立助成課に移行しているが、４月30日までは農場学校の一部として２つの練習農場での独立のための助成を実施し、５月１日独立助成課として分離し、同課は松本圭一、津江市作、小野田鎮が担当する教職員体制になった。さらに実際の「卒業生出身者独立助成指

表４　農場学校の教職員体制と役割分担

		学部分担他	教科担当他
一学期末現在	松本　圭一	校長、分院事務、済美財団兼務	4月以後授業担当せず
	上田　宗一	普通学部、農学部兼任	農学、数学
	高橋　善導	同上	農学、理化学
	永田　溥之	普通学部専任	算術、理科、国語
	江川　栄	嘱托、普通学部、農学部兼任	地理、歴史、10月10日退職
	大山　熊太	同上	修身、国語、作文、習字、珠算
	小野田鉄彌	同上	修身、聖書、算術
	津江　市作	実習担任	農場及び独立助成事務兼務
	永友今朝次	同上	体操
	小野田　　鎮	会計、事務	取次部兼務
	大島　三郎	5月１日就職	物品取次販売部
	楠戸　　赳	5月１日就職	畜産及び農場経営部助手、寄宿舎世話係助手
	直井　武夫	10月異動、嘱托教師	国語
	中村　光霽	10月29日臨時嘱托	英語、歴史、12月26日退職

（表1、表2と同様）

導及び事務」は、先の３人に加え農場学校の高橋善導、上田宗一、永友今朝次、斉藤新蔵、大島三郎が協力したのである。そして、同課の対象となる青年院児は10月１日に農場学校農学部を卒業した第３回卒業生を含む同校卒業生と農業見習終了生で、かつ、樫野第一練習農場、柳井迫第二練習農場、その他の地区で殖民として独立を目指す者であったことが確認できた。

以上のように、1919年は、岡山孤児院、特に茶臼原孤児院の中の同院尋常小学校と農場学校他の組織改編がなされ、農場学校は、農場学校普通学部と農学部に拡充され、独立助成課などが明確化してきたことが確認できた。そして、本稿で分析する岡－竹日誌は、このような大改編が実施されていく中で、岡－竹が農場学校１年生から同校農学部２年生に在学していた時期に書かれた日誌であったことになる。つまり、岡－竹日誌は、先のような背景と前提条件の中で書かれた日誌であったことが分かる。

そこで次は、岡－竹日誌のもう１つの背景と前提条件と言える、岡－竹の岡山孤児院への入所と、その後農場学校に入学するまでの経過をみていくことにする。

４）岡－竹の入院後の経歴

岡－竹は、1906（明治39）年10月26日に戸籍上は岡山県邑久郡本庄村より岡山孤児院に入院し、入院時の年齢は９歳４ヶ月であった[9]。入院理由は、母親がいなく父親のみの父子家庭であったことだけが確認できた[9]。ただし、岡－竹日誌に中に母と兄が茨城県にいるとの記述があり、今後調査が必要である。岡山孤児院では、たぶん尋常科を修了し、1908（同41）年10月まで２年間生活し、同月14日に茶臼原孤児院に移転してきたが、その当時の年齢は11歳４ヶ月であった[10]。その後、近隣の下穂北村鳥子の宮田宇太次方に農業見習に行き、1912（同45）年２月１日（14歳８ヶ月）の時点では同村大字三宅字赤池の矢野儀八郎方で農業見習をし、１年間の給与は米５俵であった[10]。以

後1914（大正３）年４月（16歳10ヶ月）の時点では給与額が米８俵になり、18歳になる1915（大正４）年は米９俵に、19歳になる翌年には米11俵から12俵になり、1917（同６）年は米12俵半までになったが、19歳10ヶ月になる２月５日に農場学校に入学したのであった[10]。

このように、岡－竹は、岡山孤児院に９歳４ヶ月で入院し、たぶん尋常科を修了し、11歳４ヶ月で茶臼原孤児院に移転し、下穂北村鳥子の宮田宇太次方で農業見習を行い、1912（同45）年の14歳８ヶ月の時点では同村大字三宅字赤池の矢野儀八郎方に移り、以後19歳10ヶ月までの５年以上矢野儀八郎方で農業見習をしていたことが分かる。このような経歴が、岡－竹日誌が書かれるもう１つの背景と前提条件であったと言える。

２．岡－竹日誌の内容と教育実践等からの影響

１）１月の日誌の内容と教育実践等からの影響

（１）１月の教育と生活の全体像

１月の岡－竹日誌から、分析課題の①農場学校での毎日の教育と宿舎等での生活の全体像を把握するためには、１月の日誌に書かれた毎日の内容を、起床から朝食前後（起床後）、農場学校登校時から午前中の学科教育（午前中）、昼食から午後の実習教育終了まで（午後中）、そして、晩食から就寝まで（晩食後）の４つの時間帯に分け、それぞれの時間帯に記された内容を要約し、それを表にまとめると、その全体像が把握できると判断した。そこで、１月の４つの時間帯別の内容をまとめると表５のようになった（以下２月、３月も同様に実施する）。

この表５を見ると、１月の岡－竹の起床から就寝までの生活日課の全体と農場学校の学科教育や実習教育の概要および同校の行事も確認できた。さらに、茶臼原孤児院の行事への参加状況も判明した。つまり、１月の教育と生活に関する日課は、宿舎での起床が午前６時前後で、起床後食堂（炊事場）に行き朝食を食べ、その前後に担当する馬に餌を与え、17日からは起床後礼拝を行い食堂に行っていた。午前８時か同８時30分から農場学校での学科教育が始まり、教科の内容は国語、算術に加え、作文、歴史、地理、英語、動物、聖書研究、園芸、特用作物などを午前中４時間学んでいた。12時か12時30分に昼食を食べ、午後１時からは実習教育で農作業を実施していた。１月の農業実習は、桑園の作業、甘藷の蔓結び、軍馬補充部での萱刈り作業などであった。作業終了は午後５時で、起床、授業開始、昼食、作業終了は、鐘の合図で茶臼原農村全体に伝えていた。

晩食は、午後５時に食堂で食べ、水曜日の晩食（夕食）はご馳走が出たようで、その後祈祷会に出席することが多かったが、宿舎に帰ると日誌を書き、算術や英語の勉強をしていた。その他、大日本高等小学講義講録を購入して学び、縫物をすることもあり、茨城県の母親や兄から手紙が届いていた。

表５　農場学校での教育と宿舎での生活等の全体

		起床後	午前中	午後中	晩食後
1月1日	水	起床6時炊事場で雑煮を食べる	10時四方拝式、松本校長、小野田鉄郎先生の話	昼食は4人で八舎にて食事をし，将棋をして遊ぶ	夜は上田先生宅にて茶話会，1年生全員でカルタを行う
1月2日	木	5時30分に起床，食事，馬を飼う	晴天，クリスマスの時できなかった運動会の準備	2時から運動会をプログラムに従い実施。5時終了	夜食後は高橋先生宅に行き，カルタで遊ぶ
1月3日	金	起床後馬を飼い6時半朝食	9時頃牛馬 加君と鶴北，妻へ買物に行く	1時からは鶴八郎宅で食事。親治郎宅などに行く	4時過ぎ牛馬 加君と三日市に行き，夜8時に帰宅
1月4日	土	起床後馬を飼い朝食	午前中は実習で豆刈を行い4把刈り，4,5人で行く	午後は鳥舎作りを7人で5時まで行う	晩食後に馬を飼い，読書を9時まで。兄より年賀状着
1月5日	日	起床炊事に行き6時朝食	10時頃初型，同級生が両に餅をやってくれた	12時昼食，1時より厳労作業を7人で4時まで実施	修養後日誌を2日分書き，晩食後入浴し，日誌を書く
1月6日	月	朝6時石井院長墓前で祈祷会	石井院父を忘れぬために終日断食		午後7時より会堂にて祈祷会，8時修養日誌書く
1月7日	火	5時に寝すきて起床，炊事に行き朝食	8時より始業式，動物，地理，英語の授業	12時半に終り1時より桑園で実習	3時修養し，馬を飼い，晩食，入浴，帰りて日記書く
1月8日	水	起床，6時半頃朝食	8時半より算術2時間，国語2時間，12時半昼食	1時より炊事部上の桑掘り4人で5時まで実施	馬を飼い，晩食は水曜日のためご馳走あり，夜祈祷会
1月9日	木	起床後炊事部に行き朝食を取る	国語2時間，算術，動物	午後より地理2時間，作文，国語	3時晩食，馬を飼い，夜は会堂で祈祷会。講義録を読む
1月10日	金	朝早く起き読書をし，麺がなり食堂へ	算術，算術，作文，聖書研究。12時昼食	1時より甘藷の蔓結を3人で行う，1町歩	晩食後馬を飼い，風呂に入り，会堂に行かず復習，読書
1月11日	土	朝起きて馬を飼い，朝食	8時半より算術，動物，歴史，国語，12時昼食	1時より九舎の下の桑の穴掘を4人で	晩食後，祈祷会に出席，来院した炭谷のおばさんの話
1月12日	日	朝常より早く麺がなり朝食を食べる	8時半頃妻町に買物に行く。シャツ，表紙，雨傘	1時半過ぎ昼食。宿舎で軍服とシャツを着てみるが底抜	晩食後少し勉強する
1月13日	月	朝5時半起き朝食	学科4時間	1時より実習。注　松君根当の桑掘りを4人で。5時終了	晩食，風呂に入りて帰り，算術と英語を勉強
1月14日	火	朝起き礼拝をし5時より朝食	作文，算術，地理，英語。12時半より昼食	1時より麦の中耕と桑切り5時に終る	茨城県の母より手紙が届く，滋　松君より時計買う
1月15日	水	朝我舎にて礼拝を調き，炊事で朝食	8時より動物，作文，国語，地理	午後より学科を5時まで	晩食は京都館でご馳走。炭谷おばさんより石井父上の話
1月16日	木	朝7人で礼拝，朝食後馬を飼う	国語，算術，国語，動物，12時半まで	1時より実習は鳥舎用の竹切り，2人で4時半まで	5時晩食風呂に入り上田先生宅へ2円借り，友人より1円
1月17日	金	朝礼拝をし朝食。馬を飼う	8時より学科を変更し実習。軍馬補充部へ豆刈り	昼食後午後より12束刈る(1束3銭)	3時半に晩食して帰り，手がつかれ休む
1月18日	土	朝礼拝をし朝食。火鉢線日中止	雨のため国語2時，郵便の話1時間	12時半昼食。1時より豆刈に行き雨のため5束切る	晩食して5時半に帰る。小豆をたき善哉を食べ古人一首
1月19日	日	朝礼拝をし朝食。馬を飼う	高鍋町で袴，帯，シャツを6円40銭で買い帰る	松本校長の奥様に神経をたのむ。二学期の成績発表	学科がダメのため一層勉強するふが生れる。
1月20日	月	礼拝，馬を飼い朝食	8時に1,2年生が集合し豆刈りに行く，午前中8束	午後に7束を刈る。豆検査を受け5時頃帰る。	寒気がこれまでよりはげしい。
1月21日	火	礼拝，馬を飼い朝食	9時より火鉢線づくり，坪池から補民宅まで	昼食，補民宅前から桜門，父の墓近くまで切り帰る	馬を飼い，晩食後宿舎に帰る。上級生に不愉快を受ける
1月22日	水	礼拝，馬を飼い朝食	8時30分に軍馬補充部の豆を刈り，午前中15束	午後6束刈り運搬し，友人より検査を受け帰る	晩食，炊事当番は25日まで，日役賃の掲示あり
1月23日	木	7時朝食	8時半より豆刈り，午前中13束	午後7束刈り道まで運搬	5時頃帰り晩食。祈祷会に出席，小野田先生他の話
1月24日	金	起床後に礼拝，朝食で日本米食べる	8時半より国語，作文を各2時間	午後は雨のため，特用作物を2時間と国語の学科	晩食後会堂での祈祷会，小野田先生と炭谷の妻話
1月25日	土	礼拝，炊事部に行き朝食	8時半より4時間勉強し12時半まで	昼食，雨天のため学科を4時間	早く晩食，京都館で炭谷のお話，7時祈祷会に行く
1月26日	日	朝集って礼拝，馬を飼い朝食	10時頃本城村へ修理中の軍服を取りに行く	昼食後1時より厳労作業。梅井迫に鳥舎用の竹を取る	3時に帰り晩食。風呂に入り，祈祷会で炭谷から話を聞く
1月27日	月	朝はこれまで同様	8時より学科4時間	12時昼食，1時より豆刈りに7,8人で行き15束	夜会堂で祈祷会，炭谷の話。10時に帰り算術を学ぶ
1月28日	火	朝礼拝食堂に行き朝食。2頭を飼う	8時半より算術2時間，国語，図案	12時半頃昼食，1時軍馬補充部で豆刈り15束	晩食は麦の雑炊。紀念会の準備発表，算術勉強
1月29日	水	朝はこれまで同様	8時半石井院父墓前で懺悔する予定が雨で中止	京都館に行き墓の懺悔をする	晩食はご馳走。7時半より祈祷会，炭谷と出身者の話
1月30日	木	朝6時父の墓前での礼拝に遅刻	10時会堂にて洗礼式(石井院長記念会)	農場学校生は全員石田組で昼食。	晩食後7時より会生で同窓会，所感を話す
1月31日	金	朝馬を飼い，面白い遊びをして過ごす	前日の日誌を書く。その後勉強する		8時頃晩食。夜は読書

（『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』より作成）

表６　１月の教科別時間数

	時間数		時間数
国語	15時間	聖書研究	1時間
算術	10時間	動物	5時間
作文	6時間	園芸	1時間
歴史	1時間	特用作物	2時間
地理	5時間	教科不明	20時間
英語	2時間	計	60時間

（『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』より作成

このように、月曜日から土曜日までは、ほぼ午前中に各教科を学び、午後は農作業の実習であったが、雨天の場合は午後も各教科を学び、午前中から農作業の日もあった。

一方、日曜日は休日で、12日は午前中妻町にシャツ等を買いに行き、19日は高鍋町で袴、帯、シャツを６円40銭で購入していたが、これらを購入するための、16日に上田先生から２円、友人から１円を借用していた。21日は例年の行事の１つとして茶臼原農村全体で、冬の山火事等を防ぐための「火消線づくり」を実施し、村内に防火用の道路を全員で作っていた。なお、18日土曜日の夜は、友人たちと小豆で善哉をつくり、百人一首で遊んでいた。22日には、炊事当番が25日までで、日役賃提出との文書が食堂に貼られていたことから、前者は朝昼夕の食事づくり（炊事）が当番制であることが[11]、後者からは家庭舎などへの農作業に対する対価として日役賃の支払いが理解できた[12]。さらに、この日役賃が日々の衣食や学資を賄う財源になることも理解できた[12]。また、26日は午後１時より献労作業があったが、これも農場学校開校当初から実施していた茶臼原孤児院への奉仕作業のことで[13]、その継続も確認できた。

さらに、１月は正月ということで、農場学校生の正月の過し方が記述されていた。また、１月７日は、農場学校の３学期の始業式であったため、始業式の内容も記載されていた。

そして、１月は、茶臼原孤児院、いや岡山孤児院の最大の行事である第５回石井十次院長紀念会が１月30日に開催されるため、岡－竹日誌にも１月６日に石井院長の墓前に農場学校生等が集り、祈祷会を実施したことなど、その後の一連の行事への参加と内容が記述されていた。

以上が、１月の農場学校の毎日の教育と生活の全体像であるが、実は上記の内容には、分析課題の②、③、⑤、⑥を裏付けるポイントが示されていた。つまり、②農場学校での具体的な教育内容とその影響については、表５の午前中と午後中の欄にまとめられた記述をさらに詳しく分析することで、１月の教育内容が理解でき、その教育内容が彼への影響の１つであると判断できた。また、③宿舎での実際の生活内容とその影響については、起床後と晩食後の欄や日曜日（休日）の記述の中に、⑤茶臼原孤児院の行事等への関わりの内容とその影響は、主に晩食後の欄や日曜日の記述、特に、１月の場合は茶臼原孤児院の最大の行事である１月30日の第５回石井十次院長紀念会に向けての一連の行事に関する記述の中に多数確認できた。さらに、同院長紀念会関連の行事は、出身者

や同校卒業生の殖民も参加する茶臼原農村全体で取り組む行事であるため、⑥出身者や同校卒業生の殖民との協力関係とその影響も明らかにできる可能性が内在していた。

そこで、次に、②、③、⑤、⑥を裏付ける内容を解明していくことにする。なお、④農場学校生の家庭舎への農業支援などの内容とその影響については、午後の実習教育の中で実施していないため、１月に該当するものはなかった。

（２）１月の農場学校での教育内容とその影響

まず１月の②の農場学校の教育内容は、１月７日に３学期の始業式から始まり、その後、午前中の学科教育でどのような教科を学び、午後の実習教育でどのような農作業等を実施し、雨天等の場合の授業内容の変更が確認できた。そこで、まず、３学期の始業式と２学期の成績発表の様子をみていくと次のようであった。

①　３学期の始業式等の様子

３学期の始業式は、１月７日に実施され、３学期の授業が始まることになる。また、前日は石井院長を思い出す断食日であったため、朝５時に炊事部に行き朝食のできるのを待ったとある。始業式は、午前８時より理科室で行なわれ、高橋先生から「勉強ニツイテ此ノ三学期ハ一二学期ヨリモ勉強スル時氣(期)ナレバ一層勉(励)メ」との訓話があり、続いて小野田鉄彌先生、津江先生、小野田鎮先生から話があった。

さらに、本日より上田先生が帰るまでは、今までの時間表に従い午前中は８時30分から12時30分まで学科教育を、午後は１時より実習教育を行うと発表された。そして、午前９時30分より動物、地理、英語の授業が３時間行なわれ、午後１時よりは実習教育として桑園で働き、午後５時に鐘の合図で農作業を終え、その後馬に餌を与え、晩食を食べ、風呂に入り、宿舎に帰り日誌を書いて、７日の始業式の１日が終っていた。

このため、３学期の始業式は、１時間目に生徒と教師が集り、教師からの訓話や今後の予定が発表され、２時間目からは学科教育を実施し、午後１時から同５時までは実習教育として農作業を行っていたことが分る。

また、１月19日には、２学期の学科教育と実習教育の成績が発表された。その成績の内容は記述されていなかったが、学科教育の成績がよくないため一層「勉強セント云ウ心ヲ起シタリ」との決意を述べていた。このため、昨年４月に農場学校に入学し、１学期、２学期と学んできたが、学科教育については、不十分な成績に終り、３学期は勉強に集中したいという、勉学に対しての意欲と決意が生れていたことに注目したい。さらに、農場学校は各学期ごとに、全員の成績を生徒に公表していたことも理解できた。

②　学科教育の内容

１月に実施した学科教育の教科別の内容等は、表５の午前中の欄に示したが、この各教科別の授業時間数をまとめると表６のようになった。ただし、毎日実施した教科名が正確に記入されていな

い日もあるので、それを前提に、１月に実施した学科教育の内容をまとめると次のようになる。つまり、国語が15時間と最も多く、次は算術10時間、作文６時間、地理５時間、英語２時間、歴史１時間、聖書研究１時間と続き、これらは基礎教科であり、１月は基礎教科を多く学んでいたことが確認できた。これは、岡－竹が、１年生であったため、３学期も国語、算術、作文等の基礎科目を中心に学んでいたことが裏付けられた。加えて、専門科目として動物５時間、園芸１時間、特用作物２時間を学んでいたことも確認できた。また、１月の学科教育の総時間は、教科不明20時間を加えると計60時間となり、１月の学科教育は60時間程度を学んでいたことになる。

実は、開校当時の『茶臼原農場學校校則』の中の「第三章學課及教授時間数」では、１年生の３学期には、１週間に22時間の授業を実施し、その内訳は算術４時間、化学３時間、動物３時間、肥料２時間、畜産２時間、地質２時間、作物２時間、園芸２時間、測量製図２時間で、これに夜学で算術、国語、製図、地歴、英語を学ぶと定めていたことから[14]、実施した教科名と比較すると一致するものと不一致のものがあり、実際の学科教育では、臨機応変な運用を行っていたことが理解できた。

③　実習教育の内容

実習教育の内容は、表5の午後中の欄に示されており、１月７日は午後１時から始まり、16日までは、桑園の整備を中心に、甘藷の蔓結び、麦畑の中耕、鶏舎用の竹切りの作業であった。17日からは、午前中の学科の授業を変更して、隣接する軍馬補充部に行き、萱刈りの作業を実施していた。18日は雨のため午後から、20日と22日、23日は１日中萱刈り作業を実施し、24日と25日は雨のため学科教育に変更し、27日と28日は午後萱刈りの作業を実施したことが分る。このため、１月の実習教育は、前半が桑園の整備作業で、後半は隣接する軍馬補充部での萱刈り作業であったことが確認できた。また、この萱刈り作業には、１束３銭の労賃が支給されたようで、学費等の一部を賄う収入源の一つになっていたことも分った。

このように、１月の農場学校の教育は、７日の始業式に始まり、学科教育は国語、算術などを中心に基礎科目７科目、専門科目３科目を学び、実習教育では前半が桑園の整備作業、後半が萱刈り作業を実施し、農業に関する基礎知識などを学んでいたことが理解できた。

（３）１月の宿舎での生活内容とその影響

①　朝夕の生活内容

次は、１月の③宿舎での生活内容とその影響をみていくと、表５の起床後と晩食後の欄および日曜日と休日に書いた日誌の記述からその内容が確認できた。１月の起床後と晩食後の生活の動向は、前述したように午前６時前後に起床し、その後食堂（炊事場）に行き朝食を食べ、朝食の前後に担当する馬に餌を与え、17日からは起床後礼拝をして食堂に行っていた。午後５時頃に農作業（実習教育）が終了し、馬に餌を与え、晩食後に入浴し、その後１月６日以降は会堂での祈祷会に出席す

ることもあり、帰宅後は算術等の勉強や日誌を書いて就寝していた。また、11日からの祈祷会では、来院した炭谷小梅から石井院長の生涯と岡山孤児院の活動に関する連続講話を聞いていた。これが１月の宿舎での朝夕の生活の動向であった。そして、１月の場合は、正月休みがあり、宿舎での正月の過し方と日曜日の過し方が次のように記載されていた。

②正月の過ごし方

岡－竹日誌の中の正月の過ごし方は、農場学校の生徒が、正月をどのように過したかの1例にもなる。

元旦は、朝起きて「新ラシキ年ヲムカエ皆喜バシク」感じつつ、午前６時に炊事に行き「ゾウニ」を食べていた。同10時より農場学校の理科教室で、四方拝式が開催され、君が代を２回歌い、松本校長が教育勅語を朗読した。その後、松本校長から「新シ心ヲモチ新ラシク事ヲナセン」との訓辞があり、小野田鉄彌先生からは「皆様ハ新キ望ヲ持チテ将来ヲ行ツテモラヒタイ」と、続いて末藤新市事務員からも「神ニ信仰セヨトノ話」があり式が終了した。

その後、天候が曇天から雨になったので、４人で宿舎にもどり昼食を食べ、将棋をして「面白ク」遊んでいた。夜になると上田先生宅で茶話会があり、１年生全員が集りカルタなどをして楽しんだ。また、お茶（「食茶」）の準備もできたので、上田先生、江川先生、第五高等学校生の古川様などとお祈りをして善哉などを食べ、夜12時過ぎまで話し合をして帰舎し、就寝していた。

このように、元旦の過し方は、朝雑煮を食べ、農場学校に登校して四方拝式に参加し、松本校長等の訓話を聞き、午後は自由時間で友人４人と宿舎で将棋をして過ごしていた。夜は、上田先生宅で１年生全員を集めて茶話会が開かれ、江川先生なども参加してカルタ取りや善哉を食べたりして夜12時まで楽しんでいたことが分る。特に、夜上田先生宅に１年生全員が集り、先生方と生徒が一緒に遊んだり食べたりして親交を深めていたことが確認できた。

１月２日は、昨年12月25日のクリスマス祝会後の運動会が雨で中止になったため、運動会を実施した。朝５時に起きて朝食を食べ、馬に餌を与え、午前中は４人で運動会の準備をし、午後２時からプログラムに従い運動会が実施され、午後５時頃終了した。帰舎後晩食を食べていると、江川先生から今夜は高橋先生宅で勉強を行うとの通知があり、高橋先生宅に行った。すると江川先生、古川様もおり、カルタ遊びや食事をしていると、小野田先生が来られたので百人一首を行い、夜12時過まで遊び帰舎していた。

つまり、１月２日は、クリスマス祝会の時にできなかった運動会を農場学校生が中心となり開催し、夜は高橋先生宅に生徒や先生が集りカルタや百人一首をして夜12時まで楽しく遊んでいた。このように、クリスマス祝会の運動会は農場学校生がその準備と運営を担当していたことが確認できた。また、１日の夜に続いて、２日も高橋先生宅で先生と生徒が親交を深めていたことから、両者の関係はさらに身近なものになったと理解する。また、このような２つの経験は、岡－竹を含めた生徒の勉学への意欲を高め、かつ将来の楽しい思い出になると推察できた。

１月３日は、妻町に買い物に行き、農業見習先でお世話になった農家に新年のあいさつに行っていた。朝起きると畑一面に霜が降り、霜柱が立つなか馬に餌を与え、午前６時半頃朝食を取り、同９時頃友人１人と上穂北村から妻町に行き買物をした。たのまれたものがあり郵便局に行き、旧農業見習先の矢野儀八郎宅には午後１時に着き昼食を食べた。家族はみな元気で、源治郎宅や牛田様宅にも行き、牛田様からは100余円で購入した馬を見せてもらい、蕎麦をご馳走になった。さらに、小麦３升をもらい、１升は石井院母へ、１升は松本校長へ、１升は本人へということであった。午後４時過ぎになり、友人の農業見習先にも一緒に行き、そこでも善哉をご馳走になり、帰りはあちこちに電気が付く薄暗いなか午後８時頃帰舎していた。

このように、３日は、友人と妻町へ買物に行き、午後からは下穂北村大字三宅字赤池の農業見習先などへ新年のあいさつに行き、ご馳走にあずかるなど、農業見習を通して、地元の人々と新しい人間関係を築づいていた側面も理解できた。そして、正月はこの３日間で終了した。

③　日曜日の過し方

１月５日の日曜日は、午前10時頃から初雪が降り一寸ほど積ったが雨に変り、12時には晴天になったので、昼食後献労作業として生徒７人で旧大山先生宅の樋を午後４時まで掛かって修繕したようで、日曜日の献労作業の内容の１つが確認でき、茶臼原孤児院の建物の修繕であったことが分る。また、この献労作業を通して日曜日の自由時間の一部を茶臼原孤児院のために貢献する、公共（他者）への奉仕の精神が育まれていたとみる[13)]。

12日の日曜日は、朝食後午前８時30分頃から妻町に生徒４人で買物に行き、本人はシャツ、表紙、雨傘一式を95銭で購入し、午後１時30分に帰宅していた。帰宅後昼食を食べ、買って来たシャツと軍服を試着したが合わず、シャツを買った店に返却しに行ったようである。帰りには斉藤先生に会い一緒に帰って来た。そして、19日の日曜日は、小野田先生と同級生６,７人で高鍋町に袴を買いに行き、新福屋で袴を買い、さらに帯とシャツも買ったが、計６円40銭の買い物となった。このお金は、16日上田先生に２円、友人に１円を借りたものが含まれていた。また、午後３時に帰宅し昼食後すぐに松本校長宅に行き、奥様に袴縫を頼みに行ったとあり、袴の腰上げ等を依頼したとみる。そして、この日は２学期の成績発表もあった。

26日は、朝食後午前10時頃木城村の店に行き修繕を依頼していた軍服を取りに行ったが、完成していなかったので帰宅した。午後１時からは献労作業を行い、柳井迫第二練習農場に鶏舎をつくる竹を取りに行っていた。

このように、日曜日の生活は、1月5日と26日午後から献労作業があり、日々奉仕の精神が養われていたことが分る。12日は妻町へ、19日は高鍋町へ、26日木城村へと近隣の町村に、シャツ、雨傘、袴、帯などの買い物や軍服の修繕のため外出し、購入資金の不足分は、先生や友人に借金までするという、衣服のファッションに興味を持つ若者の姿が垣間見えた。また、本人は、軍服への憧れを持っていたことが理解できた。

（３）第５回石井十次院長記念会と関連行事からの影響

そして、分析課題の⑤茶臼原孤児院の行事等への関わりとその影響の解明は、１月の場合、第５回石井十次院長紀念会に向けての一連の行事に参加した内容とその影響を明らかにすることとほぼ一致する。また、⑥出身者や同校卒業生の殖民との協力関係の一端も理解することができた。

第５回石井十次院長紀念会と関連行事とは、毎年１月30日が石井院長の命日にあたるため、その日に同院長紀念会が開催されていた。また、その準備は、例年１月初旬から一連の行事があり、１月30日の同院長紀念会に向けて茶臼原農村全体が、石井院長の遺志を再確認し、継承していく、最も重要な行事として実施されていた[15]。1919年は、１月１日午前６時に石井院長墓前で祈祷会を行い、６日は午前６時から同院長墓前で有志による遺言紀念の断食祈祷会が、午後７時からは会堂で初週祈祷会が開かれた[16]。また、11日には炭谷小梅が来院し、20日には同院長紀念会に関する打合せ会が行われ、28日午後７時からは静養館でスップ晩餐会が開かれ、30日に第５回石井十次院長紀念会が開催されたのであった[16]。

特に、農場学校生にとって石井院長は、彼らの父親的存在であったため、岡－竹日誌にも、石井院長を「父上」と記し、父親そのものと認識していたことが分る。このため、岡－竹も同院長紀念会に向けての行事に参加し、一連の行事の内容や岡－竹の考え等が同日誌に記載していた。そこで、その一連の行事の内容とそのような行事を通してどのような影響を受けていたかを、分析していくことにする。また、先の影響の内容は、農場学校生たちの、共通意識に近いものであったとも判断できるからである。

まず１月６日に、石井院長の墓前に農場学校生などが集り、祈祷会を開催したが本人は遅刻してしまったと書いている。また、６日は１日断食日で、この断食は「五年前亡キ父(ヲ)ワスレヌ為」めに実施したものであった。さらに、午後７時から会堂で祈祷会が開かれ、それにも参加し同８時に帰舎していた。

翌７日は、始業式であったが空腹で午前5時に起き、「我等ハ一日喰ハズトモ」このような状態になるのに、「父上ハ一週間モ其上モナサレタトノ事」を聞き、「父上ニスマ(ヌ)マ」と述べていた。このように、石井院長の断食の事実を聞き、その行為を実行し、同院長の遺志の一端を試みてみたが、忍耐力に欠ける自らの状態を自覚し反省していたことが分る。

１月８日は、水曜日のため晩食にご馳走が出て、その後会堂での祈祷会に出席していたが、これは６日から実施されている初週祈祷会のことである[16]。同会では讃美歌を歌い、お祈りの後、「父上ノ信仰ガ強ク常ニ断食一週間モ其上モナサル信仰」を持っていたとの話を聞き、「我等モ父ノ後ヲ綴(継)ギ信仰ヲセネ(ベ)ナラヌト感ジタ」と石井院長のキリスト教への深い信仰を継承していくことを再確認していた。翌９日も夜の祈祷会に出席し、「父ノ祈祷ノ事」についての話があった。10日の祈祷会は、雨天となり傘がないため欠席し、その傘は12日に購入していた。

11日には、石井院長が最も信頼し、信仰上の母とも言える炭谷小梅[17]が岡山市より来院し、夜の

祈祷会で「御話」があったが、農場学校生等は炭谷のことを「炭谷ノオバサン」と呼んでいたことが分かった。また、先の「御話」の内容は、「聖書ハ我々ガ常ニ食スル飯ト」同様で、「一ツタベザレバ弱ル」、「食スレバ大元気(ニ)ナレル」ものであり、「聖書ヲ食シ讀ミ神ニ祈リ信仰セヨ」と話されたので、「我等モ實ニ感ジタリ」と述べていた。つまり、毎日ご飯を食べると元気になるのと同様に、毎日聖書を読むと元気が出るので、聖書を毎日読んで、神に祈り、信仰を深めるようにという、分り易すい内容の話しに、岡－竹も納得したのであった。

１月15日は、午後５時の学科教育終了後、「晩食ハ京都館ニ馳走アル故エ行ク事」と書かれてあったので、みんなで京都館に行き、炭谷のおばさんのお祈りの後食事をし、いろいろと「面白ク遊」んだ。その後また集り礼拝をして炭谷のおばさんより石井院長の岡山甲種医学校時代の話を聞いた。その話の内容は、「亡キ父上」が「少年時代ヨリ信仰ア(ッ)タ」人で、「岡山醫学校通学シナサルコロ洋服」もなにもかもが粗末で、靴などは履かず下駄ばかり履き、「アワレナ學生ヲ見テ」は自分の学費をその友人に与え、自分は按摩をして稼ぎ、医学校に通学されたとの講話があり、かつ「皆様モ父ノ後ヲ續ギテト望マレタリ」と述べ、最後に新約聖書テモテ書４章12節の「なんじら年幼きを以て人に輕(かろ)んぜらるゝ勿(なか)れ言と行と愛と信と潔(きよき)を以て信者の模(のり)楷となるべし」との聖句[18]を示して終了したと記述していた。

この記述から、炭谷は、農場学校生などに、石井院長が苦学生であった青年時代から貧しい人を見れば自分のものを分け与えていたという、キリスト教者としての信仰の深さを伝えていたことが理解できる。また、先のような話を聞いた岡－竹の感想は記載されていなかったが、炭谷から聞いた話の内容と聖句を日誌に記していたことから、先の講話の内容が本人自身の脳裡に深く刻まれるものになったと理解できる。特に、新約聖書テモテ書４章12節は全文ほぼ正確に記述しており、メモを取りながら炭谷の話を聞いていたのかも知れない。そして、このような石井院長の生き方が農場学校生などを通して伝承されていくことも予想できた。

23日の祈祷会でも、小野田先生のお話の後に、炭谷のおばさんから石井院長が「少(青)年時代」に岡山孤児院を始めた当時のお話があり、この話を聞いて岡－竹は「ヤリ出シタ事ハドコマデモヤリ通ス」ということを学び、本人もこのように実行したいと述べていた。これは、岡－竹が石井院長の信仰に基づく実行の精神を継承されて行くことを学んだとも理解できた。24日も晩食後会堂での祈祷会に出席し、小野田教師の話の後に炭谷から、岡山孤児院設立当時の話があり、「信仰ノ深キ事何事モ神ニモ祈」って実行することを理解したようであった。そして、午後８時半頃に終り、その後日曜学校の準備をして帰舎したが、その時に石井院長は「少(青)年時代」から優しい人だったとの感想を持ったのであった。これは、その時に石井院長の愛を悟ったのかもしれない。

25日も、晩食後午後7時から祈祷会があり、炭谷と末藤事務員から「御話」があった。26日の祈祷会では、炭谷から音楽隊が「明治三十二年」にでき、石井院父がコレラとなり、母上（品子）が死去し「大困難ノ有様」のなかで、今の院母が「家内トナラレタルトコロマデ」の話を聞いた。翌

27日は、東北飢餓のため貧孤児を収容し1,200人となり、「二十年紀念ニハ大運動會」を行うなどの話があった。

そして、１月28日は、29日の紀念会の準備の役割が発表されたが、29日は雨天で石井院長の墓の周囲に幕を張る作業が中止となり、京都館の幕張りを行った。午後７時30分からの祈祷会では、炭谷から「四十年ヨリ今日マデ」の話があり、次にある事務員より「自分ノ歴史」が話され、「石井父上ガ自分等ニドレ程愛情アリシカ考エル時」に、これは「山ヨリ高ク海ヨリ深シ」と考えられ、「我等ハ此後奮闘シテ亡父上ノ後(跡)ヲツガネバナラヌト感シタリ」と述べていたと記述していることに注目する必要がある。つまり、この文章は、炭谷の連夜にわたる石井院長の岡山孤児院での実践を含む、同院長一代記から学び、かつ、岡－竹と同じ立場にある当事者の自分史を聞き、農場学校生としての自らの立場と役割を深く理解し、石井院長の遺志の継承を明確に自覚した文章であると判断できるからである。

このように、30日の第５回石井十次院長紀念会に向けて、炭谷小梅が来院し、連夜開催された祈祷会で石井院長の一代記を農場学校生などに説明し、石井院長の遺志を伝達していたことが確認できた。同時に、岡－竹を含む農場学校生など茶臼原農村の関係者は、炭谷から石井院長の一代記を聞き、その遺志の継承を深く自覚したと理解できる。

そして、１月30日の同院長紀念会などは、まず午前６時に石井院長の墓前で有志による祈祷会で始まり、同10時からは会堂で洗礼式が実施され、岡－竹を含む農場学校生14人など計25人が受洗した[16]。その後午後２時より同院長紀念会が開催され、松本校長の聖書朗読、炭谷小梅の「愛ノ人トシテ故院長」と題する演説などがなされ、同７時からは農業見習生、出身者の懇談会が開かれ[16]、農場学校生も参加したとみる。

岡－竹日誌では、同院長紀念会の実際の動きの一端と懇談会（同窓会）の内容が理解できた。本人は、朝６時からの石井院長墓前での礼拝に遅れ、恥ずかしい思いをしていた。また、雨天により墓前での洗礼式は中止となり、同式は午前10時より会堂で実施された。その後昼食は、殖民地の人々が館野宅で、小学校生徒は会堂で、農場学校生と農業見習生は石田組で、にぎり飯と漬物を食べた。先の炊事は、女子部の各家庭舎よりの炊出しで「皆有難ク」食べていた。午後１時よりは、会堂で農業見習生に小野田先生と炭谷のおばさんより「御話」があり、全ての院児たちに菓子が配付され、食べて帰舎していた。

晩食後は分析課題⑥に該当する同窓会が会堂で開かれ、末藤事務員、上田先生、松本校長の「御話」があり、その後、同校生や卒業生が順番で今の所感を述べた。富－畠君、宮－山君の次に本人が「顔ヲ赤クシ」て所感を述べ、岡－江君、広－大君、山－石君、愛－西君は農業見習生に対し、「大気焔」をはいたとある。また、その中で岡－江君から「我ガ父上ハ常ニ木綿着物ヲ着頭(ヘ)ボース質素ナリ」、長髪は農業に不適当で「亡キ父上ハ大キライデアッタ」。農業見習生は、女のように「粉粕ヲツケ」る暇があったら垢でも落としたらどうかと発言していたが、この発言に強く感じた

者もいたと書き残していた。そして、先のような発言が出てくる背景には、質素で堅実に生活や農業に取り組姿勢を農場学校での教育から学び、かつ、そのような生き方が石井院長の遺志を継承するという認識を、岡－竹を含む農場学校生が持っていたことを意味し、このような発言と記述の中に、農場学校での教育の成果の一端と岡－竹自身の内面的成長も垣間見ることができる。ただし、最も重要と思われる、洗礼式で岡－竹自身が受洗したことを日誌に記載せず、雨天のため洗礼式を石井院長墓前でなく、会堂で実施したとしか書いていなかった。

このように、１月の第５回石井十次院長紀念会とそれに向けての行事から⑤と⑥の内容の一端が明らかにできた。新年から初週祈祷会等の行事で始り、今年は炭谷小梅が来院し、祈祷会等で石井院長の一代記として、キリスト教の信仰に基づく岡山孤児院の創立から永眠までの苦難の歩みを連続的に講話した。また、炭谷の講話などを通して岡－竹を含む農場学校生等は、石井院長の遺志の継承をさらに深く自覚しつつ、同院長紀念会後の同窓会では、殖民を目指す農場学校生がその自覚を表明するなど、同校の教育の成果や同校生徒の内面的成長も理解できた。さらに、同院長紀念会に向けた一連の行事は、茶臼原孤児院を含む茶臼原農村全体を１つにまとめる重要な行事で、岡－竹もその一員として活動し、先輩の殖民たちとの交流から、将来殖民として独立する道筋をイメージすることもできたとみる。

もう１つ加えれば、１月21日に実施した冬の山林火災を防ぐため茶臼原孤児院の周囲に火消線という道づくりの共同作業も、同院関係者と殖民が協力して実施する恒例行事で、これにも参加し、その内容も確認できたことである。

２）２月の日誌の内容と教育実践等の影響

（１）２月の生活と教育の全体像

２月の生活と教育の全体を要約すると表７のようになり、１日の生活日課は、春の気ざしを感じながら午前６時頃起床し、礼拝後食堂（炊事部）に行き朝食を食べ、担当の馬に餌を与えるとあり、14日までは同８時30分から、15日以降は同８時から学科教育が始まっていた。その学科教育は、午前中が４時間実施され、算術、国語、化学、歴史、作文、英語、園芸、地理、聖書研究に加えて、12日から畜産が始り、果樹剪定も学んでいた。正確な時間表までは確定できないが、算術の時間数が相対的に多かったようで、かつ担当教師の都合や行事で時間表を変更し、雨天の場合は午後まで学科の授業を行い、農作業の進捗状況によっては午前中の学科の授業を実習に振り替るなど、１月同様臨機応変に対応していたことが分る。

昼食は、14日までが12時30分からで、15日以降は12時になり、午後の実習教育はいずれも同1時からであった。実習教育では、麦への追肥や土掛け、厩舎の整備作業、桑切り等の桑園の仕事、田畑の耕作および雨天時は藁細工も実施していた。また、４日には柳井迫第二練習農場の殖民（長－松）宅の家づくりに行っていた。

表７　２月の農場学校での教育と宿舎での生活等の全体

		起床後	午前中	午後中	晩食後
2月1日	土	朝馬を飼う	8時半より算術、国語、化学2時間	12時半昼食、1時より実習、4人で麦2反歩に肥料をやる	夕食後入浴し、上田先生より外出許可をもらう
2月2日	日	朝3時に起き紀元2月2日	下穂北村赤地に行く途中の妻町で買物し7時着	源治郎宅でご馳走になり友人にも会い、雨天のため泊る	友人と昔しのことを思い出し9時に就寝
2月3日	月	4時半に起き源治郎宅を出発	8時40分より歴史、作文、算術、国語	1時より畑　松虎は麦に肥料を、本人は桑に肥料を与える	5時に晩食のため帰り、学校の蒲を食べ日誌を書く
2月4日	火	朝礼拝、7時食事	8時半より学科、12時半まで	1時より実習で梅井迫の雑民宅の家づくりを4人で行う	5時に帰り晩食、予科生入学のため2人泊る
2月5日	水	朝寒い6時起床、7時朝食	9時より入学式、30人入学し松本校長他より話	10時40分より英語2時間、昼食後1時より麦に肥料を与える	5時半に帰り、ご馳走を食べ、友人と遊び日誌を書く
2月6日	木	朝礼拝、7時朝食	8時半より時間表を変更し終日実習4人で	午後3人で風呂の小屋づくり、5時半終了、馬を飼う	晩食後宿舎に帰り勉強
2月7日	金	朝礼拝、7時朝食	8時半より学科、12時半まで	1時より実習、5人で厩舎づくり後第2南天作業舎へ	晩食後入浴。明日の歓迎会の準備のため6人を選出
2月8日	土	6時起き、7時朝食	8時半より学科、12時半まで	1時より実習、薪割工、4時終了。5時歓迎会	新入生1人づつ挨拶、1年生、2年生、卒業生の所感あり
2月9日	日	起床朝食	10時頃木城村の店に行き12時帰る	1時より厩舎作業、1年生、2年生厩舎の屋根はり	上田先生宅の風呂に入り、大工宅に行き、縫物をする
2月10日	月	雨天、7時半起き朝食	8時半より学科12時半まで4時間	午後学科3時間、1時間復習。5時半夕食	友人の手紙着く。永友先生より明日9時木城小学校へと
2月11日	火		木城在郷軍人会の集りで木城小の紀元節に出席	1時より演習があり5時に終る。組合長の話しあり	6時半に帰り、松尾組で晩食。討論会で奉公の仲協議
2月12日	水	6時半起床7時朝食	8時半より学科初めて畜産2時間半と地理	1時より厩舎の仕事を8人で行い、木城村へ話動写真に行く	7時から始り11時終り、12時帰宅
2月13日	木	朝霜をし、7時起床	午前中は第一厩舎、第三厩舎の屋根修理を3人で	昼食後は1時より事務所の屋根を2人で。5時終了	晩食後雑民の次男の葬儀に行かず日誌を書く
2月14日	金	6時起床、朝食、馬を飼う	8時半より算術2時間、整番研究、果樹剪定	昼食後桑の間掘りの作業。5人で小野組前から九舎まで	5時半終了、晩食、読書、日役賃を計算
2月15日	土	7時起床、朝食	本日より8時に始り4時間学科、12時終了	昼食後1時より実習、桑切り出し、第三厩舎の修理	5時半終了、晩食、入浴、青年会の集会あり。日誌書く
2月16日	日	6時半起床、朝食、にぎりを作ってもらう	6人で集り在郷軍人会の点呼の事前練習に行く	午前10時より練習。午後も綱引きなどの練習をし帰宅	晩食後勉強し、昼の疲れで休む
2月17日	月	朝雨天	8時より勉強4時間	午後も雨天で学科、国語、図表、化学	日曜日の準備中止。暖くなり春近し、早く床に着く
2月18日	火	暖い朝、7時半朝食	8時半より算術2時間のところ図表に変更	1時より実習、陸稲の畑起き、2反1畝終る	晩食後日曜日の準備会に行く。10時に終り日誌書く
2月19日	水	7時起床朝食	8時より学科4時間	12時昼食、1時より実習4人で桑に肥料入れ、切り出し	馬を飼い、晩食はご馳走で泊撮。古米の麦飯
2月20日	木		木城村小学校での点呼予習に3人で行く	2時まで練習する。木城村青年会の運動会を見物	病院し5時晩食し早く休む
2月21日	金	7時10分頃起床、馬を飼い朝食	8時より12時まで勉強	昼食後1時より麦に肥料を与える	6時までに帰り晩食、1年生全員帰舎し、予科生が来る。
2月22日	土	起きて梅の花をみる。7時20分食堂へ	8時20分より学科4時間	1時よりぬかり田を耕すが暖くなり早く帰り入浴	宿舎番となり五舎に行く。午後の疲れで早く休む
2月23日	日	7時起床、馬を飼い朝食	在郷軍人会に行く。11時より12時まで練習	昼食後2時より分列式の練習。公園券と記章を買う	帰り赤飯等を取り永友先生へ売る。今後は馬2頭を飼う
2月24日	月	6時起き5舎より食を飼い朝食	8時より歴史、算術はなく図表を2時間	昼食時出席を取り大庭理事来院の発表。麦の土掛け	晩食後炊事、勉強。春の始めの暖い夜になる
2月25日	火	5時10分起床、8時朝食	算術2時間比例を学ぶ。	昼食後会堂に集り大庭新理事の挨拶あり。豆腐料す	晩食後炊事員会を開き、衛沢係となる
2月26日	水	6時起床、馬を飼い朝食	8時大庭理事を見送る。9時20分より畜産、地理、国語	官　邦の入営を見送り、3人で木城小学校に練習に行く	晩食後明日の準備のため飯を炊き弁当を作る
2月27日	木	目覚まし8時許の音が5分ならず4時30分起床	銘168　小豊と菅　菊子宅に行き集合し木城小学校へ	在郷軍人会の点呼式あり。剣術、銃剣術の成績は良い	
2月28日	金	6時起床、朝食	8時より学科、12時半昼食	1時銘248　辺豊と陸稲の畑起きを5時半まで	晩食後久しぶりに入浴。日曜日の準備と鯛を買う

（『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』より作成）

午後の実習教育は、午後５時から同５時30分の間に終了し、馬に餌を与え、晩食後入浴（毎日ではない）し、宿舎に帰り、日誌を書き、勉強や読書をする時もあり、縫物も自分で行い就寝していた。水曜日の晩食は、ご馳走が出ていたようで、農場学校で飼育していた鶏を食べたり、雑炊粥の時もあった。２日日曜日は再度農業見習先を訪問し、９日日曜日の午後は、献労作業を実施していた。また、晩食後にはいろいろな行事があり、８日に新入生歓迎会、11日に討論会、15日に青年会、25日に炊事員会が開かれ、20日には大庭新理事も来院した[16]。その他、27日の在郷軍人児湯郡連合会の総会へ参加する準備として、岡－竹は16日、20日、23日に農場学校を休み、他の友人たちと事前練習を実施していたことが確認できた。

このため、１月同様、分析課題②は学科教育や実習教育の内容から、③は予科生の歓迎会等や日曜日に過ごし方からの内容から明らかにでき、柳井迫第二練習農場の殖民宅の家づくりや在郷軍人会の行事への参加は、⑥出身者や農場学校卒生の殖民との協力関係を知る内容に該当するといえるので、次に２月の②、③、⑥を解明していくことにする。

（２）２月の農場学校での教育内容とその影響

①　学科教育の内容

２月の学科教育の概要は、表７の午前中と午後中の欄で確認でき、判明する範囲で教科別の時間数をまとめると表８のようになる。全体の授業時間数は72.5時間と１月より12.5時間増加していたが、教科不明も44時間に増加し約６割を占めていた。このため、教科別時間数が正確に確定できないが、判明している教科名と時間数をみると、算術６時間が最も多かった。また、国語と作文は１月より激減し、算術も半減したが、園芸が７時間に急増し、新たに化学と畜産が加わっていた。

これは、『茶臼原農場學校校則』の中に３学期は化学と畜産を教えることが明記されていたため[14]、それを具体化したものと判断できる。このため、まだ実施してない教科は、肥料、地質、作物、測量製図ということになる[14]。

このように、２月は学科教育の時間数が１月より多くなり、農閑期に学科教育を増やし、園芸に加えて新たに化学や畜産という専門教科を追加していたことから、岡－竹の学科教育に関する学び

表８　２月の教科別時間数

	時間数		時間数
国語	3時間	英語	2時間
算術	6時間	聖書研究	1時間
作文	1時間	園芸	7時間
歴史	1時間	畜産	3.5時間
地理	2時間	教科不明	44時間
化学	3時間	計	72.5時間

（『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』より作成

が深まったと理解できる。

②　実習教育の内容

２月の実習教育は、表７の午後中の欄に概要が示されているが、１月から実施していた麦畑と桑園への追肥等の農作業に加え、風呂づくり、厩舎の整備、陸稲畑の鋤き方などを実施していたことが確認できた。また、４日には柳井迫第二練習農場の殖民（長－松）宅の家づくりにも行っており、さらに８日は雨天のため藁細工の実習も行っていた。

このように、２月の実習教育では、麦畑、桑園の耕作、陸稲畑の準備等の農作業に加え、厩舎等の建物の整備という建築土木関係の実習や藁細工にも取り組んでいたことが分る。このため、２月の分析課題②は、学科教育の時間数が１月より多くなり、農閑期に学科教育を増やし、園芸に加えて新たに化学や畜産という専門教科を追加していたことおよび、実習教育では、麦畑、陸稲畑等の農作業に加え、厩舎等の建築土木関係の実習や藁細工を学んでいたことが理解できた。

さらに、５日には予科生の入学式など、大小の学校行事が確認でき、次にその内容をみていくことにする。ただし、先の大小の学校行事は、宿舎での生活の中で実施されたものが多く、分析課題③に該当する宿舎での生活内容の1つとしてまとめていくことにする。

（３）２月の宿舎での生活内容とその影響

①　予科生の入学式や歓迎会等の内容

２月５日に、予科生の入学式が実施され、一度に30人が入学することになった[16]。前日の４日には、在学生の宿舎に予科生が２人ずつ宿泊し、５日午前９時から入学式が実施され、松本校長の訓示と津江先生の訓話および２年生の山－石君の話、そして、入学生代表よりの挨拶で終了し、同10時40分から学科教育を行った。７日は、予科生の歓迎会の準備のため６人の生徒が選ばれ、岡－竹は余興係になった。翌８日の歓迎会は、午後５時よりの会食で始まり、同７時30分からは三－山君の司会者で、新入生が１人ずつ前に出て挨拶をした。その後、１年生、２年生、卒業生が所感を述べ、石井院母より差し入れのお茶とお菓子を食べ、江川先生の歌の後松本校長の祈祷で、夜12時に終了した。

このように、予科生の入学式と歓迎会の内容や雰囲気が確認でき、岡－竹は、昨年入学した時のことを想い出し、「ナツカシキ」と記していたが、これは、岡－竹が入学した１年前の自分の姿を今回の入学生の姿に重ね合わせて、自分の１年間の成長を振り返っていたのかもしれない。そして、歓迎会では、入学生、１年生、２年生、卒業生が、全員の前で所感を表明していたが、この表明は、１月30日の同窓会でも実施されていたので、注目すべき教育活動であると筆者は理解した。

つまり、青年期にある当時の農場学校生等（入学生を含め）が、教師や生徒等の全員の前で、自分の考えを述べる行為は、全員が見守るという重圧と緊張感の中で自分の考えをまとめ、なるべく全員が理解できるような言葉に変換して表明するという行為が内包されていると理解できるからで

ある。また、その表明した内容は、その場で全員から評価を受けることになり、今後自分の行動に責任が生じることになるからである。このため、日ごろから自分の考え方をしっかり持ち、自分の考え方を主張できる個人として成長する努力が必要になり、精神的に自立した個人になることが求められるからである。その意味で、農場学校で実施していた、この方法は、生徒たちが一人の個人として精神的に自立するための教育活動であったと言える。また、生徒たちが、先のような行為を何度も経験するうちに、自分の考え方をまとめる力が醸成され、卒業までには人前で自分の考え方を冷静に述べられる人間に成長すると想定できるからである。さらに、友人の考え方を聞いた生徒たちは、他者である友だちの意見を理解する力も育まれ、個人の意見を大切にする、個人尊重の教育活動にもつながると言えるからである。

実は、自分の意見を表明するような教育活動は、後述する11日の討論会や15日の青年会でも行われていたようで、このような教育活動を実施した背景には、松本校長が仙台市の旧制第二高等学校時代にキリスト教青年会に参加し、同会の寄宿舎で生活していた時の経験が原点になっていると推測する[19)]。

そして、11日の討論会では、農業見習先を殖民地にするか、これまで通り近隣の農家に出すかを話し合っていた。これは、当時茶臼原孤児院内で農業見習生のあり方が検討されていたため[20)]、当事者であり、経験者である農場学校生に、今後の農業見習先として、身内の殖民地がよいか、それとも近隣の農家がよいかについての意見を聞き、その有効性や弊害を裏付けるため、松本校長が意図的に討論会を実施したものと理解でき、このような教育活動の生徒への影響は、前述した通りである。また、討論会そのものは、晩食後定例的に実施されていたとみる[21)]。

実は、農業見習生の見習先の問題については、当時朝鮮総督府済生院長よりも問い合せが来ていて、その１つに「院内ニテ農業ヲ課スルト農家ニ見習トシテ差遣スルトノ利害及見習差遣ノ時期、期間如何」という質問があり、その回答を松本校長が1919年４月に作成していたことから[22)]、先の討論会等での生徒たちの意見も参考にした可能性があると言えるからである。なお、その回答の内容は、量が多いので省略する[22)]。

12日には、午後の農作業を少し早く終了し、４,５人で木城村大字高城へ活動写真を見に行っていた。15日には、会堂で青年会が開催され、「不愉快」を感じたと記していることから、農場学校生全員が参加する青年会が存在し、ひょっとしたら、11日の討論会で結論が出ていなかったため、その続きが実施され、同校生の間で意見の相違が明確化し、「不愉快」を感じたのかもしれない。

14日には、1月22日に続いて日役費を書き出していたことから、毎月日役賃を計算し、学資等の収入を得ていたことが再度理解できる[12)]。25日には、上田先生宅で炊事員会が開かれ、本人は薪灰係となったとあるが、この炊事員会は、毎日の３食の献立を作成し、食料品を調達し担当者が食事を作り、その費用の収支決算をまとめて、費用を徴収するなどの役割を担う、宿舎での生活教育の重要な係であったが[11)]、ここからその存在が再確認できたことになる。

②　日曜日の過し方

２月の日曜日の過ごし方は、２日が旧正月であったため、前日に福80－加君と相談し、２日に農業見習中に知り合いになった下穂北村字赤池の源治郎宅等を訪問することにし、上田先生宅に行きその許可を得え、１円を借用していた。そして、２日は午前４時半に起きて、朝食後赤池に出発した。途中妻町で買物をし、同７時頃源治郎宅に着きご馳走になった。また、農業見習中に友人となったとみられる院児ではない池田芳太郎君にも会い帰る予定であったが、雨天のため一泊し明日朝帰ることにした。その夜は先の友人と語り合い、昔かしのことを思い出しつつ午後９時に就寝した。そして、翌３日は、朝４時半に源治郎宅を出発し、農業見習先の矢野儀八郎のおばあさんに会ってお茶を飲み、餅をもらって午前６時に帰舎し、同８時40分からの授業を受けていた。

このように、１月３日に続いて農業見習中に知り合った関係者を訪問し、親交を深めていたことは、岡－竹に新しい親族ができ、もう１つの拠り所になっていたとみる。その意味では、農業見習中の経験が良い方向に作用すれば、今後本人が地域の中で生きていくための新しい人間関係を作る場になっていたことが理解できた。

９日の日曜日は、起床後朝食を食べ、午前10時頃に木城村の店に出かけた。12時に帰り午後１時よりは献労作業があり、１年生、２年生とも厩舎の屋根張り作業を同５時まで行い、晩食を食べた。その後上田先生宅で風呂に入り、大工宅に遊びに行き同8時頃帰舎し、縫物をし、日誌を書いて就寝していた。16日の日曜日は、在郷軍人児湯郡連合会に参加するための事前練習を終日行い、23日も練習を行ったが、この内容は次項でまとめることにする。

このように、２月の日曜日も、旧正月ということで昔の農業見習先等を訪ねたり、木城村に出かけたり、献労作業を実施したり、在郷軍人児湯郡連合会の総会に参加するための事前練習をしたりと毎週外出し、１週間に１回の休みを自分のための時間などとしてフル活用していたことが分る。なお、２月の日曜日は、日曜学校や礼拝に出席したという事実は記述されていなかった。

（４）殖民宅の家づくりと在郷軍人児湯郡連合会の総会への参加

２月４日は実習教育の一環で、柳井迫第二練習農場の殖民宅の家づくりに行っていたが、これは分析課題⑥出身者や農場学校卒業生の殖民との協力関係を知る出来事の1つであった。また、この殖民宅の家づくりは、同農場の殖民が農場学校卒業生であったため、岡－竹などの在校生が、これから農業で独立自活する３，４年後の自分の姿を具体的にイメージできる存在（事例）にもなったと理解できた。

そして、在郷軍人児湯郡連合会の総会への参加も⑥に関係する行事で、この件については、詳しい内容が記述されているので、次のその内容をみていくことにする。つまり、同軍人会は、満20歳の時に徴兵検査を受け甲種や乙種合格となった予備役兵等が入会する全国組織であるため[23]、1917（大正６）年５月７日に徴兵検査を受け「第一乙歩兵第参拾壱番ノ上位」となった岡－竹[24]を含む

農場学校生や殖民6人が指名され、同児湯郡連合会の総会に参加することになった。このため、岡－竹などが、事前に点呼召集等の練習を行うことが必要となり、軍人としての基礎を学び、地元の青年たちと交流する機会にもなったのであった。

まず、2月11日は紀元節ということで、農場学校でも午前9時より紀元節の式典が開催されたが、岡－竹の場合は、10日に永友先生より木城尋常高等小学校での木城在郷軍人会主催の紀元節の式典に行くように連絡があったため、11日は福168－小君と同小学校に行き、同10時からの式典に出席し、午後1時からは演習もあった。また、この時2月27日に在郷軍人児湯郡連合会の総会があり、木城村在郷軍人会は16日、20日、23日に点呼召集の練習を実施するので、当日は脚絆、草鞋靴で参加することが通知された。そこで、16日は本人を含む農場学校生など6人が参加し、午前10時から午後4時まで練習した。

20日は、朝起きて佐藤組で弁当を作り、福168－小君と香－掘子君など3人と午前8時30分頃に木城尋常高等小学校に着き、同10時より事前練習に参加した。午後からは木城村青年会の運動会があるため、事前練習は午後2時で終了し、昼食を食べ、木城村青年会の運動会を見物し、同5時に帰舎した。23日は、朝7時に起床し、同小学校に午前9時頃着くが、分列式の練習は同11時から12時で、昼食後は午後1時より同4時頃まで行い、同5時に帰舎した。また、昼食後に奉公袋と記章を20銭で購入していた。

そして、27日の在郷軍人児湯郡連合会総会の当日は[25]、目覚まし時計を借りていたが、その時計の音が耳に入らず、起きた時は午前4時30分であった。「サー大変トハネヲキ」て福168－小君と香－掘子宅に行くと長－松君、宮－山君が来ており、朝食を食べ島－若君を待った。曇天のため小野田先生から雨合羽を借り同5時半に出発した。会場で木城分会員を待ち、今井中尉の指示により各小隊ごとに集合し点呼をしていると、同8時30分に30分遅れで始まるとの連絡があった。同児湯郡連合会総会は、東京在郷軍人会本部の長沼（永沼）中将閣下や第六師団長など多数が出席し、今井中尉の勅語朗読に始まり、各県知事などの挨拶の後に長沼中将の「御話」があり、12時に終了し、昼食となった。午後1時からは、これまで練習してきた分列式、剣術、銃術を披露したが、木城分会は成績が良かったと記している。

このように、徴兵検査後には、農場学校生や殖民が地元の青年と一緒に在郷軍人会を通して、点呼召集や分列式の練習を実施するなど、同年代の青年たちと交流する機会があると同時に、軍人としての基本的な教育や精神を養成する経験をし、軍人や軍隊への興味や憧れを醸成する場になっていた。また、前述したように、岡－竹は、すでに軍服を手に入れ、シャツを購入し、今回の演習にはその軍服を着て参加したのかもしれないが、徴兵検査で予備役兵に選ばれることへの優越感と満足感が内在していたことが、岡－竹日誌の行間から読み取れた。

表９　３月の農場学校での教育と宿舎での生活等の全体

		起床後	午前中	午後中	晩食後
3月1日	土	6時半起床、7時朝食	8時より学科	1時より実習、第二厩舎の整備を4人で5時まで	晩食、会堂で岩村一家への新婚会10時まで
3月2日	日	起床、7時朝食	9時より礼拝に行く、10時より小野田先生の話	昼食、別科生の軽労作業あり、散歩をし、花映人に	晩食後「城跡」の遊びをし紅茶を5人で食べ、勉強
3月3日	月	起床、朝食の鐘で7時に食事	帝都復興記念祭で休日となり、江川先生の話を聞きく	家庭舎の農業支援の担当が決定し、柳沢組へ	6時晩食、7時より勉強
3月4日	火	鐘の合図で起き、勉強、7時朝食	8時より学科4時間	12時昼食、1時より柳沢組に行き麻畑の床作り、6時まで	帰りて晩食、入浴して帰り、国語の試験勉強
3月5日	水	6時半起床、7時朝食	8時より学科	午後も学科5時に終る	晩食後10時まで勉強
3月6日	木	雨降ふる	8時より学科4時間	午後学科2時間、復習。雨で寒く寒と思う	
3月7日	金	雨起き雨の中食堂に行く	8時より学科	午後よりも学科	夜は会堂に行き日曜学校の準備、教育担当に
3月8日	土	起床晴れ、7時朝食	8時より学科、12時食堂に行く	浅田主婦の送別会のため3時半まで柳沢組の畑を耕作	着物に着替え会堂に行く。送別会より帰り算術の試験勉強
3月9日	日	朝2時に起き針つき、7時朝食	日曜学校に行く。寄藤先生宅で行う。帰りて会堂へ	札幌に出張。昼食後算術、国語の復習、3時散歩	6時晩食
3月10日	月	桜の花が映く中で起床	8時より地理、国語の試験	午後は柳沢組に行き、桑畑、甘藷の種植の準備	6時お茶を飲み帰り、晩食し入浴。算術の宿題と日誌
3月11日	火	雨より味噌づくり	1年生全員実習、第一厩舎作業所の整理	午後は柳沢組の桑畑の追肥、白菜等の種子を柳沢主婦へ	夕方雨が降り、夜は算術の勉強
3月12日	水	鐘の合図で起床、桜の花が映く中食堂へ	8時より音楽2時間、地理2時間	1時より雨のため柳沢組の桑畑の追肥できず早く帰る	夜は兄弟にハガキ4枚書く
3月13日	木	朝起き7時朝食	8時より実習、馬を引き商舗へ買物に行く。11時着く	雑記帳と自分の算術ときき方2冊を買う。2時帰着	永友先生と晩食し、夜は勉強
3月14日	金	起床、桜の花に春日が輝われる	8時より学科、12時終了	1時より柳沢組に行き桑畑に追肥と切出し	6時終了鶏舎をご馳走になる。夜は国語の試験の勉強
3月15日	土	起床、霜が少し降る	8時より国語の試験2時間、国語	午後桑切出し、6時に帰り晩食。	夜8時から少年会の総会と日曜学校の準備、会堂になる
3月16日	日	起床7時朝食	8時より日曜学校に行く。院見と軍馬補充部で遊ぶ	12時昼食、1時より軽労作業。五舎の屋根の整備	5,6人で鶏卵を食べ、11時まで
3月17日	月	朝寝をし食堂で朝食	8時より学科、地理、化学を12時まで	1時より柳沢組に2人で妻へ追肥を6時まで	晩食後柿酒の検査。風呂に入り、物用作物の試験勉強
3月18日	火	雨早く起き、試験の準備、7時朝食	8時より物用作物の試験、国語、新聞の読み方	1時より馬を借り堆肥づくり、6時に帰る	夕食後勉強
3月19日	水	蛙の声を聞き起床、7時朝食	8時より音楽、地理各2時間。	1時柳沢組に行き、甘藷、胡瓜、牛蒡等づくりの作業	晩食後、郵便ボックスに置いた兄の写真を取って帰る
3月20日	木	7時起床し朝食、勉強を読む	8時より実習、水路工事を5人で12時まで	昼食、1時より柳沢組に行き、堆肥の床作り	晩食後勉強
3月21日	金	庭に鶯啼き起床。生徒皆笑顔で朝食	8時の鐘の合図で登校、試験を実施	12時昼食、1時より柳沢組に行き里芋植え、6時終了	晩食し夜は早く休む
3月22日	土	雨6時半起き7時朝食	春季皇霊祭で午前中休校	午後は水路工事をし、6時終了	晩食後運動し、日曜学校の準備で会堂へ、手紙を出す
3月23日	日	7時起床、朝食	8時より日曜学校に行く。23人集り、組み分けを実施	その後礼拝12時終了。午後は明日の動物学の試験勉強	上田先生より生徒一同に煙のサイをもらう。早く休む
3月24日	月	起床、雨天、7時朝食	8時より歴史2時間、動物学の試験	午後歴史2時間、国語（復習）2時間。	夜会堂に行き日曜学校の準備。4月より担当の変更発表
3月25日	火	7時起床晴天となり朝食	8時より勉強、12時まで	1時より柳沢組に行き、麦の中耕など実施	夜は校事員会が舞踏会であり9時終了。手紙を受け取る
3月26日	水	起床、4月1日までは終日実習、雨天は学科	8時よりの実習は桑植準備で、6人で実施	午後柳沢組の田打ちを6時まで行う	夜は山田君の送別会を食堂で実施
3月27日	木	朝より雨で暖寒あり	8時より音楽の試験、9時より実習で水路工事	雨のため午後は食習	休む
3月28日	金	6時半起床	朝より実習、水路工事で土運搬	午後大豆畑を耕し、6時に帰る	夜は総代選考し、4人選ばれ、4月3日の修高会の相談
3月29日	土	雨早く起き寄合巻、4人となる	午前中水路工事を7人で実施	12時昼食、午後柳沢組に行き、馬で大豆畑を耕作	6時に帰る
3月30日	日	起床、食堂に行き朝食、復活祭	日曜学校の生徒を連れ会堂へ、その後礼拝	1時より軽労作業として水路工事	夜松原組で農業見習生の送別会。8時会堂でお御会
3月31日	月	6時起床、6時半朝食	8時より水路工事を実施	午後柳沢組の大豆畑の耕作、6時まで	夜3修高会の内容を決め、日曜学校の準備会

『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』より作成

3） 3月の日誌の内容と教育実践等の影響

（1） 3月の生活と教育の全体像

3月の農場学校の教育と生活の全体的な動向を要約すると、表9のようになり、起床は午前6時30分前後で、朝食は同7時に食堂で食べ、同8時から学科教育が4時間あり、各教科の期末試験も実施されていた。12時に昼食を食べ、午後1時からの実習教育は、3日から家庭舎の1つである柳沢組の農業支援を中心に行った。このため、1月、2月とは相違していた。先の農業支援は同6時に終わることが多く、晩食後は毎日ではないが入浴し、期末試験の向けての勉強などを行うことが多く、その他に日曜学校の準備等も実施していた。

このため、3月も分析課題の②、③は、同校の教育や宿舎での生活内容から明らかにでき、⑤茶臼原孤児院の行事へのかかわりも判明し、新たに④農場学校生の家庭舎への農業支援の内容も解明できるので、次にまとめていくことにする。

（2） 3月の農場学校での教育内容とその影響

①　学科教育の内容

3月の学科教育は、通常の授業に、期末試験が加わるが、教科別等の時間数などの内容をまとめると表10のようになる。確認できた教科と時間数（推定含む）は、国語4時間、歴史4時間、地理7時間、化学2時間、園芸2時間、特用作物2時間、畜産5時間に、動物学3時間が加わった。これに、自習を含む教科不明の時間数（推定含む）が52時間あり、計83時間程度の学科教育が確認できた。また、5日、6日、7日、24日、27日は午後も学科教育を行い一方、11日、13日、20日、26日、27日（9時から)、28日、29日、31日は午前中から実習教育であった。

そして、3月は期末試験が実施され、1日から晩食後勉強（復習）を行っていた。4日は、起床後に勉強をし、晩食後も来週月曜日の園芸の試験に備えて勉強し、その他「甘藷トアンゼラースノ鐘」と題する作文の宿題を行っていた。7日は午後11時まで算術の試験勉強をし、9日は日曜学校と礼拝を終えた後、午後から算術と園芸の復習を同3時頃まで実施し、その後散歩に出かけていた。10日は午前8時より、地理と園芸の試験があり、夜は晩食後算術の宿題を行ったが1問も解けず

表10　3月の教科別時間数

	時間数		時間数
国語	4時間	園芸	4時間
歴史	4時間	特用作物	2時間
地理	7時間	畜産	5時間
化学	2時間	教科不明	48時間
動物学	3時間	計	79時間

（『大正八年日誌　茶臼原農場学校□□□□』より作成）

「シャクニサワリ日誌ヲ書キ休ム」とあった。

13日夜も勉強し、14日夜は国語の試験対策を行い、翌15日に国語の試験が１時間目にあった。17日は明日の特用作物の試験準備のため、晩食後薪の検査をし、入浴後に勉強し、翌18日朝も早く起きて試験の準備をし、１時間目の特用作物の試験に臨んでいた。また、21日は、午前中４時間とも試験があり、「皆忙シ」かったとあり、この日が期末試験の最大の山場であったことが分る。24日は、３時間目に動物の試験があり、前日は日曜日であったので、午前中に日曜学校と礼拝に出席し、午後からは試験勉強を行っていた。27日は、畜産の試験があるため、25日の炊事委員会後の午後９時より、26日は宮－山君の送別会後に試験勉強をしたが、27日の１時間目の試験は「頭痛ノ為メ充分答エル事」ができなかったようである。

そして、期末試験の結果を含む３学期の成績は、４月２日に発表され、本人の成績は、算術67点、作凡78点、動物100点、国語73点、作文74点、園芸45点、肥料85点、土壌72点、植物78点と好成績のようであった。なお、作凡は作物汎論[26]の略称で、特用作物のことを指しているとみる。また、『茶臼原農場學校校則』の中の「第三章學課及教授時間数」[14]に示された教科名と比較すると、化学の成績がなく、測量製図は授業そのものが実施していなかったことが理解できる。

このように、３月の学科教育は、８教科などの授業を計83時間程度実施し、特に、期末試験を行い、成績は全員に公開されたが、本人は好成績のようであったことが分かる。

②　実習教育の内容

３月の実習教育は、３日に家庭舎への農業支援の担当者が発表されたことで、分析課題④農場学校生の家庭舎への農業支援の内容が確認できた。１月、２月は確認できなかった、家庭舎への農業支援は開校当時より同校生の学資を得るための重要な手段でもあった[12]。その３日は、朝鮮国王の死去にともない午前中は同学校が休みとなり、午後から実習教育を行うことになったが、この日は各家庭舎への農業支援を実施する担当者が発表された。主に各家庭舎出身の農場学校生が各家庭舎の農業支援を実施することにし、出身家庭舎のない同校生は女子部の家庭舎の支援を行うことになった。このため、本人他２人は柳沢組の担当になり、３日、４日、８日から12日、14日から22日、25日から31日（日曜日や雨天日を除）までの18日間、柳沢組の南瓜の床作り、甘藷、牛蒡、白菜、胡瓜、山芋、大豆等の畑の耕作、桑畑の追肥、麦畑の追肥と耕作、田打ちなどを実施していた。

このように、３月の実習教育は、農場学校生が各家庭舎の農業支援を中心に実施し、野菜作りや桑畑、麦畑等で耕作を学びつつ、学資を得ていたことが分かる。この他、13日は午前８時より実習で高鍋町へ馬を引いて買物に行き、同11時に着き、雑記帳、味噌、算術とり方２冊を買い、午後２時前に帰院していた。

（３）３月の宿舎での生活内容とその影響

３月の宿舎での生活内容は、前述したように、晩食後は期末試験に向けての勉強が中心で、それ

に後述する日曜学校等の行事の準備を実施していた。その他、２日日曜日は、午前９時から礼拝に出席し、小野田教師のお話を聞き同11時30分に終了し、午後１時からは献労作業が行なわれたが、今回の同作業は別科生が担当したため本人は参加せず休みとなった。そこで、近くを散歩し、菜の花や麦の芽の成長を見て、「我モ今ニ花咲人ニナルカ」、良い行ないをし、最後には「良キ實ヲムスバネバナラヌト思フ」、「之レ常ノ心掛一ツナリ」との感慨（心境）に至ったが、この言葉の中に、善人として努力して生きていくことで必ず実りある人生が訪れるという意味が含まれ、岡－竹の当時の心境（内面）が表れていると理解する。

また、22日は春季皇霊祭のため休日であったが、午後からの水路工事に参加していた。25日夜は雑用舎で開かれた炊事員会にも出席し、午後９時に終了していた。26日夜には、宮－山君が岡山市に行き苦学することになり、その送別会が食堂で開かれた。同会は、始めに神を賛美して祈り、山－石君が開会の言葉、松本校長と小野田鎮先生より宮－山君の岡山市行きの事についての説明があり、讃美歌を歌って終了したと記していた。

28日夜には、今後の青年会（青年会とは記してないが前後の関係や２月に同会が実施されていたことから判断した）の事業とその総代４人の選出がなされた、岡－竹他３人が選ばれた。このため、上田先生宅を訪れ夜12時まで話し合い、４月３日に娯楽会を開催することを決めていた。30日の午後１時からは献労作業で水路工事を行い、夜は松尾組で、農業見習に行く年長院児の送別会に出席していた。

このように、３月の宿舎での生活は、期末試験の準備や日曜学校の仕事の他にも炊事委員会、送別会、献労作業などへの参加が確認でき、多様な経験をしていたことが分かる。特に、28日は、岡－竹が青年会の運営の中心となる総代の１人に選出され、４月から２年生に進級する中で、生徒たちのリーダーとなっていくことが理解でき、仲間から信頼される人物に成長してきたことが理解できる。また、青年会のような活動は、生徒たちが組織の自主的、主体的な運営を体験的に身に着ける機会となり、自治意識を涵養する活動になったとみることができる。そして、この自治意識の涵養は、農場学校開校当時から松本校長が意図的に推進した活動で[27]、それが岡－竹を含む生徒たちに根付いてきたことの一端が、岡－竹日誌から読み取れるということでもある。

（４）茶臼原孤児院等の行事への参加とその影響

３月の岡－竹日誌から確認できた、茶臼原孤児院等の行事への参加状況は次のようであった。１日夜に会堂にて「岩村一家」のための祈祷会が開催され、これに出席していた。この祈祷会は、岩村真鉄事務員の妻が重病となり、岩村愛子も２月25日東京で永眠したため[28]、岩村家への見舞のため行なわれたようで、岡－竹は茶臼原農村の一員という意識で出席していたとみる。

７日には、浅田主婦の退職にともなう送別会が開催されるが、農場学校生は昼食時に黒板に貼ってあった「浅田様ノ帰(送)別會ヲ會堂ニテ集リ有ル」と書かれた連絡で知った。そして、昼食後の午後

１時に出席が取られ、同３時までに仕事を終え、遅れないように同４時までに会堂に集るよう指示があった。本人は柳沢組の牛蒡、甘藷の農地の耕作を同３時半に終了し、着物に着替えて会堂に行き、同５時頃送別会は始まり、菓１袋をもらって帰って来た。

そして、３月の同院等の行事への参加で最も注目すべきは、２月にも散見できたが、岡－竹が日曜学校の企画と運営を担当し、８日夜には会堂で日曜学校の準備会を行ない、本人が同学校の「教エ人」に選ばれたことである。そして、翌９日は朝午前２時に起きて餅をつき、この餅は日曜学校の生徒に配付するためであったとみる。同学校は、斉藤先生宅で開催され、家庭舎の院児（生徒）が多数集り、宮－山君が讃美歌を教え、福194－立君が祈りとお話を40分位行い、最後に福80－加君のお祈りで終了していた。このように、日曜学校の運営は岡－竹等の農場学校生が中心となって実施していたことが理解できた。

その後は、15日（土曜日）夜８時から会堂において少年会の総会と日曜学校の準備を行い、２年生が柳井迫第二練習農場の仕事に行く間の４月まで本人が会頭に選出された。そして、16日の日曜学校は、午前８時より実施され、近くの軍馬補充部に院児たちを連れて遊びに行き、城取りや運動、最後の「話会」では生徒も先生も感想を述べ、11時30分頃終了した。帰りは「西ヲ見テモ東ヲ見ルモ」菜の花と桜が咲く景色を見ながら、「茶臼原ハ天國ナリ」と思いつつ帰着したと記していた。

22日は、晩食後日曜学校の準備のため会堂に行き、翌日は午前８時より同学校を開催した。生徒は23人集り、歌を歌い、各組に分け組長を選び、愛－西君のお話と江川先生のお祈りで終了した。次の礼拝は、小野田先生が旅行中のため、上田先生の説教が12時まであった。24日も日曜学校の準備会が会堂であり、４月からの院児の組の担当変更が発表され、本人は幼稚科２学年男女を担当することになった。

30日は、復活祭のため、日曜学校の生徒を連れて会堂に集り、讃美歌を歌い、江川先生の司会で、小野田先生の話等と合唱があり、最後に日曜学校の新しい先生が発表された。つまり、日曜学校の先生は、農場学校生が１ヶ月ごとに交代で担当していたことが分る。

また、30日の午後１時からは献労作業で水路工事を行い、夜は松尾組で農業見習に行く年長院児の送別会に出席した。また、午後８時からは会堂でお伽会があり、「皆面白ク話シヌ合歌（唱）ヲナシ愉快ニ感ジ」て同11時に帰ってきた。翌31日は、日曜学校準備会で、幼稚科２年生の担当や、小野田先生から「カードノ説明」があり、茶が出て「面白ク」準備をして同11時頃に終り、帰舎して英語の勉強をしたと記していた。

このように、茶臼原孤児院等の行事の中で、農場学校生が日曜学校の企画と運営を実施し、３月は岡－竹が担当となり、いろいろな企画を立てて家庭舎の院児を楽しませていたことが確認できた。このような行事の企画と運営は、本人を含め農場学校生および院児たちに、キリスト教の信仰を日常的なものとし、自然に信仰心が浸透するような経験になったと理解する[29]。さらに、日曜学校の活動は、茶臼原孤児院を含む茶臼原農村全体に、キリスト教的な文化を根付かせる役割を担い、1

月の第5回石井十次院長紀念会を頂点に、「基督教的農村」[30]が日常化することにも貢献したと理解する。また、岡－竹は、２年生が柳井迫第二練習農場の仕事に行く間の４月まで、少年会の会頭に選出されており、青年会の総代の１人に選任されたことと相まって、リーダーシップを持った、院児や生徒等から信頼される人物に成長していたことが再度理解できたことである。

おわりに

本稿は、岡－竹日誌の内容から、農場学校の５年目の教育実践の成果の１つを明らかにするため、７つの分析課題を設定し、今回は農場学校の３学期に当たる１月から３月までの日誌の内容を分析してきた。特に、分析課題①から⑥までは、月別にその内容を明らかにしたので、ここでは岡－竹への日常的影響と⑦本人の内面的成長を中心にまとめることにする。

①農場学校での毎日の教育と宿舎等での生活の全体像は、月別に、毎日の起床から就寝までの生活や日曜日の行動などからその全体像が把握できた。次に②農場学校での具体的な教育内容については、学んでいた教科名と時間数を確認し、農閑期の３学期は学科教育の充実が理解でき、かつ期末試験では岡－竹も積極的に勉強していたため、農業等の基礎知識を深く学ぶことに役立ったと理解できた。また、③宿舎での実際の生活内容は、第５回石井十次院長紀念会に向けての一連の行事への参加、農業見習先への訪問や近隣町村への買い物、日曜学校の準備や炊事委員会、青年会などの運営への参加という多様な体験が、彼に大きな影響を与えたと理解する。特に、１月と２月に農業見習先へ２回訪問しているが、これは農業見習を通して、岡－竹が地元の人々と親戚に近い新しい人間関係を作っていた出来事として注目できた。④農場学校生の家庭舎への農業支援などの内容は、３月に実施され、各種の農作業を経験していたことが分かった。⑤茶臼原孤児院の行事等への関わりの具体的内容は、同院長紀念会に向けての一連の行事への参加と日曜学校の企画や運営などに積極的に参加し、炭谷小梅の連続講話を聴くなどし、父上である石井院長のキリスト教に対する信仰の深さや岡－竹を含む院児への愛の強さを自覚し、石井院長の遺志を継承していくことを再認識すると同時に、同院を含む茶臼原農村の一員であると意識するなどの、多様な影響を受けたことが理解できた。⑥出身者や同校卒業生の殖民との協力関係では、⑤の茶臼原孤児院の行事等への関わりの中でも、その事実か確認できたが、その他に、柳井迫第二練習農場の殖民宅の家づくりも、在校生の近い将来がイメージできる事例として影響があったと言える。また、在郷軍人会の行事への参加は、満20歳以上の同校生などで徴兵検査を機に兵役の義務が生じた者の、軍人や軍隊への興味と憧れを醸成し、岡－竹もその１人として影響受けていたことが理解できた。

そして、①から⑥を踏まえた、⑦本人の内面的成長については、第５回石井十次院長紀念会に向けての一連の行事などを通して、石井院長のキリスト教に対する信仰の深さを自覚し、石井院長の

遺志の継承を再認識し、茶臼原農村の一員であることを理解するような成長が読み取れた。また、日曜学校の運営や青年会などの活動からは、自主的、主体的な運営を体験的に身に付け、自治意識が養成されたとみることができた。さらに、同窓会や予科生の歓迎会等で自分の考えを表明する機会が何度か確認できたが、これらの経験を通して自分の考え方を冷静に述べると同時に、他者の考えを理解できる個人としての精神が養われ、そのような成長も想定できた。

加えて、「我モ今ニ花咲人ニナルカ」、良い行ないをし、最後には「良キ實ヲムスバネバナラヌト思フ」、「之レ常ノ心掛一ツナリ」との感慨（心境）に至ったが、この言葉の中に、善人として努力して生きていくことで必ず実りある人生が訪れるという意味が含まれ、岡－竹の当時の心境（内面）が表れていると理解できた。また、この心境は、１月30日の同窓会で農場学校生が、石井院長の質素で堅実な生活を主張する場面の記述と関連していたと筆者は判断した。つまり、質素で堅実な生活を実行し、善人として努力して生きていくことで必ず実りある人生が訪れるという考え方を持つまでに成長していたとみることができたからである。

そして、以上のような岡－竹の内面的成長は、松本校長が農場学校の教育で目指した、農業に関する知識を学ぶと同時に、「ソノ理想トスル所ハ堅実ナル信念ト高潔ナル人格トヲ具備セル実際的人物ノ輩出」[31]という理念に一歩近づくものであったと、筆者は理解した。さらに、このような内面的成長の前提には、開校後５年目を迎えた農場学校が全体で培ってきた歴史と、その中で醸成された同校独自の文化が存在したことが考えられ、その中で岡－竹が１年間生活しつつ学んだ結果であろうことを付け加えておきたい。ただし、５年間の歴史の中で培ってきた農場学校独自の文化の内容そのものについては、十分に言及できない現状にあり、今後並行して解明していくことが研究課題となる。

註

1）拙筆「岡山孤児院の茶臼原農場学校での4年目の教育実践の内容とその実績」『東北社会福祉史研究』第34号、2016年３月、１頁から49頁。他多数。

2）拙筆編「ある農場学校在校生の日誌－大正八年度日誌－」『岡山孤児院におけるネットワーク形成と自立支援に関する総合的研究』、2010年３月、335（1）頁から279（57）頁。ただし、翻刻の内容にミスがあり、今回は再確認しながら修正している。

3）拙筆「石井十次の死と岡山孤児院の運営体制の縮小」『石井十次資料館研究紀要』第２号、2001年４月、17頁、18頁、51頁。

4）拙筆「大正期の岡山孤児院の運営体制と大原理事時代（２）」『共栄児童福祉研究』第９号、2002年３月、54頁。

5）拙筆「岡山孤児院の『茶臼原農村』づくりと農場学校開校の前提条件」『ライフデザイン学研究』第7号、2011年3月、174頁、175頁。

6）以下この項の事実関係は、拙筆「大正期の岡山孤児院の運営体制と大庭理事時代（1）」『東北社会福祉史研究』第20号（2002年6月）、49頁、50頁からの引用または要約である。

7）以下この項の事実関係は、6）の48頁（表1）、50頁、56頁から59頁からの引用または要約である。

8）以下この項の事実関係は、6）の62頁から68頁からの引用または要約である。

9）岡山孤児院『入院原簿壱』の「明治三十九年十月二六日」。

10）茶臼原孤児院『見習生原簿』の「明治四十一年十月移住十八組」、「明治四十三年八月農業見習生巡視」、「自明治四十五年六月十六日至大正元年八月十一日　大正元年八月奉公児巡視並俸給協定復命書　綾部寅太」。茶臼原孤児院『大正四年一月現在院児名簿』の「下穂北村」。『大正五年ノ壱現在院児名簿』の「下穂北村」。『大正五年ノ弐現在院児名簿』の「下穂北村」。『大正六年現在院児名簿』の「下穂北村」。

11）炊事の当番制や炊事委員会については、農場学校1年目から実施されていた（拙筆「岡山孤児院の農場学校での一年目の教育実践の内容とその実績」『石井十次資料館研究紀要』第14号、2013年8月、123頁から125頁）。

12）家庭舎への農業支援等の対価としての日役賃の支払いや、日役賃が日々の衣食と学費を賄うものであったことも、農場学校1年目から具体化していた〔11）の118頁、119頁〕。

13）献労作業も、農場学校1年目から実施されていた〔11）の129頁、130頁〕。

14）5）の167頁、168頁。

15）拙筆「大正期の岡山孤児院の運営体制と大原理事時代（1）」『共栄学園短期大学研究紀要』第18号、2002年3月、123頁から125頁。

16）茶臼原孤児院『大正八年度日誌』の1月1日、1月5日、1月6日、1月11日、1月20日、1月28日、1月30日、2月5日、2月20日。

17）柴田善守著『石井十次の生涯と思想』、春秋社、1978年10月、340頁。

18）「黒崎幸吉著 註解新約聖書 Web版第1テモテ書」によると「なんぢ年若(としわか)きをもて人(ひと)に輕(かろ)んぜらるな、反つて言(ことば)にも、行状(ぎょうじょう)にも、愛(あい)にも、信仰(しんこう)にも、潔(きよめ)にも、信者(しんじゃ)の模範(もはん)となれ。」（stonepillow.dee.cc/kurosaki_frame.cgi?54+4+2-4）とあり、ほぼ正確に記録していたことが確認できる。

19）5）の151頁、152頁。

20）『茶臼原農場学校資料』の「大正八年度以後方針原案第一案上」。

21）5）の173頁。『茶臼原農場學校校則』の中に「學術研究会及ビ辨論練習会」の規定があり、1ヶ月に1回開催すると定められていた。

22)『朝鮮總督府濟生院長ヨリノ質問ニ對スル答書』（大正八年四月作成）に中に、同済生院長からの「七、問、農業教育ニツキ左記事項承知シタシ」の「（イ）問、院内ニテ農業ヲ課スルト農家ニ見習トシテ差遣スルトノ利害及見習ノ差遣ノ時期、期間如何」という質問に対し、「答、甲、院内ノミニテ農業ヲ課スルニ當リ欠点ト認ムベキハ左ノ点ニアリ」として３点を、「乙、院内ニテ課スルニ當リ有利ノ点ハ左ノ如シ」として2点、「丙、農家ニ見習トシテ差遣スルコトニ存スル欠点」として９点、「丁、見習差遣ニ伴フ有利ノ点」として８点などを回答していた。

23)「徴兵検査」、「在郷軍人」、「帝国在郷軍人会」は『日本史広辞典』、山川出版、1997年10月、883頁、1428頁、1463頁。

24）茶臼原孤児院『徴兵検査成績調』の「大正六年度徴兵適齢者」。

25)『日洲新聞』の1919年３月２日付の「児湯郡軍人總會高鍋町蚊口海濱」の記事によると、２月27日に開催された在郷軍人児湯郡連合会総会の内容は、次のようであった。

前日（26日）は在郷軍人宮崎郡連合分会総会が実施され（『日洲新聞』「在郷軍人總會宮崎神宮神苑」、1919年２月27日付）、翌27日に在郷軍人児湯郡連合会総会が開催された。会場は高鍋町の蚊口浦海浜で、児湯郡内より3,500余人の在郷軍人が参加し、永沼中将、小池師団長など多数の来賓が出席し、午前９時30分より来賓あいさつ等があり、永沼中将は１時間にわたり「在郷軍人の精神の鍛錬と能力増進」や「軍人の覚悟等其他在郷軍人の趣旨徹底」を説いた。12時半に昼食となり、午後１時からは余興として綱引競争、銃剣術の90余組の試合があり、同４時半に散会した。また、露店や見世物小屋も出て、近隣から18,000人程が集まったようである。

26)『中国民報附録』第七千九百七拾四号（大正五年六月弐拾日）の「岡山孤児院報告第二回」の「茶臼原農場學校－創立の經過と内容一般－　校長農學士松本圭一」の「學科及實習」に「作物汎論」の教科名がある。

27）財団法人岡山孤児院『大正四年度年報』の「三、茶臼原分院報告」の「（四）農場學校報告」の「二、本校ノ内容」の中で、「生徒ニハ自治ノ精神ヲ鼓吹シ」宿舎での炊事においても委員を選出し、早天祈祷会などでも全て「生徒各自ニ司会ヲナシ自発的ニ彼等」が始め、かつ生徒の代表者は「彼等各自ニ互選セル所タリ」と、開校当時より生徒の自主性、主体性を重視した、自治精神の養成を目指していたことが分かる。

28）16）の２月25日、３月１日。

29）27）の「二、本校ノ内容」の中で、「本校ノ主旨」は将来農業で独立するために必要な内容を準備するためにあるが、「同時ニ彼等ノ精神即チ信仰問題ハ本校ノ最モ重視スル所ニシテ彼等ノ思想精神ノ帰向スル所ハ将来彼等ノ運命開拓上至大ノ関係アル」と、キリスト教の信仰を基本とする教育を目指していた。その具体化の１つが、農場学校生が中心となって日曜学校の行事を企画し、運営することであったと理解する。

30)「基督教的農村」という言葉は、西内天行著『信天記－石井十次詳傳－』（1918年７月発行）の

第19章第274節の中に出てくる。石井院長は、岡山孤児院の負債解消と院児の将来の自立のために、1908（明治41）年頃から院児を茶臼原孤児院に再度本格的に移転し、同院を含む茶臼原農村づくりに着手するが、道半ばの1914（大正３）年１月30日に永眠した。実は、その直前の1913（大正２）年12月18日から27日まで東京帝国大学農科大学を卒業した松本圭一が、茶臼原孤児院を訪れ、永眠間近の石井院長と10分ほど会見する〔註５）148頁〕。その場面等の記述に中で、西内は、松本が「石井君に面接し、始め掛けられたる基督教的農村の建設に対し、大いに共鳴するものがあって、何とかして之を理想的に成就したいとの希望を有するに至った人である」（752頁、753頁）と記述していた。このため、石井院長の目指した茶臼原農村づくりは「基督教的農村」づくりであったと筆者も判断し、かつ松本がそれを具体化しようとしていたと理解した。

31）27）の「二、本校ノ内容」の中で、「之ヲ要スルニ本校ハ主トシテ農事ニ関スルコトヲ學バシムルニアリト雖モ而モソノ理想トスル所ハ堅実ナル信念ト高潔ナル人格トヲ具備セル実際的人物ノ輩出ニアリテ必ズシモ農タリ工タリ商タルヲ問ハザルナリ」と記していた。